

ダイジェスト版

子どもの生活と 学びに関する親子調査 2024



「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて ... p.2

調査概要 p.3

基本属性2024 p.4

I 子どもの生活の変化 p.5~12

1. メディア時間の变化
2. 生活習慣
3. 親子の会話
4. 人とのかかわり
5. お手伝い
6. 遊び場
7. 1年間の経験
8. 自己認識

II 子どもの学びの変化 p.13~22

1. 学習時間の变化
2. 学校での生活
3. 学習意欲・学習方法の理解
4. 勉強や教科の好き嫌い
5. 文理意識・学習動機

6. 学習方略

7. 得意・苦手(子どもの自己評価)

8. デジタル機器の利用①

9. デジタル機器の利用②

10. デジタル機器を使った学習の効果と影響

III 保護者のかかわりの変化 p.23~25

1. 大切さを伝えていること
2. 子どもへのかかわり
3. 家庭でのルール

IV 保護者の教育実態と教育意識の変化 p.26~29

1. 教育費
2. 子育てや教育に関する情報源
3. 悩みや気がり①②

V 親子の意識や満足度 p.30~31

1. 親子の進学意識
2. 満足度・幸せ実感

調査企画・分析メンバー p.32

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。

本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環として行った2015年から2024年までの調査結果を載せています。

研究プロジェクトの特徴

01

小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

本研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施しています。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「複数時点の時代変化」をみることができます（図中②）。

02

親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

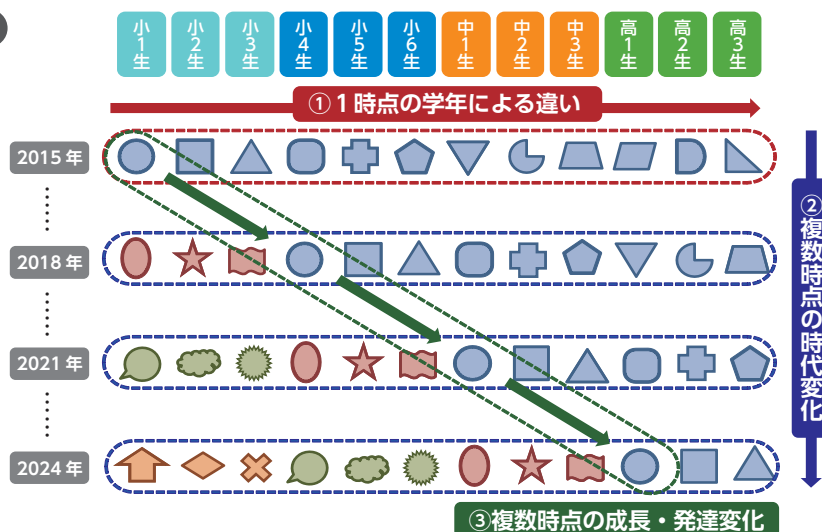
また、本研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査しています。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、同じ親子の「複数時点の成長・発達変化」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

03

子どもの生活と学びにかかわる意識や実態を、幅広く詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広くたずねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などをたずねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。

調査のイメージ図



※研究プロジェクトの詳細は、最後のページで紹介しているWebサイトよりご覧ください。

◇データ扱い上の注記

・図表で使用している百分率(%)は、小数第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査概要

調査テーマ

子どもの生活と学習に関する意識と実態(子ども調査)
保護者の子育て・教育に関する意識と実態(保護者調査)
……同一の親子を対象に2015年から継続して追跡する縦断調査

調査時期

2024年7～9月

調査方法

郵送にて調査を依頼、Webにて回答
※2015年～2024年では、調査依頼は各回とも郵送、回収は2015年郵送・Web併用、2016～2020年郵送のみ、2021年郵送・Web併用、2022年からWebによる回答のみ。

調査対象

全国の小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者
※小学1～3年生は保護者が回答。

発送数・回収数・回収率は以下の通り

	全体			小1～3生			小4～6生			中学生			高校生		
	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)
2015年	21,569	16,574	76.8	5,504	4,690	85.2	5,080	3,950	77.8	5,379	4,051	75.3	5,606	3,883	69.3
2016年	21,485	15,849	73.8	5,617	4,915	87.5	5,234	3,797	72.5	5,225	3,706	70.9	5,409	3,431	63.4
2017年	19,136	15,307	80.0	5,700	5,167	90.6	4,662	3,643	78.1	4,312	3,311	76.8	4,462	3,186	71.4
2018年	18,217	14,424	79.2	5,408	4,928	91.1	4,634	3,616	78.0	3,977	2,967	74.6	4,198	2,913	69.4
2019年	20,056	15,311	76.3	5,879	5,175	88.0	5,251	4,071	77.5	4,497	3,168	70.4	4,429	2,897	65.4
2020年	20,413	15,656	76.7	5,921	5,127	86.6	5,639	4,407	78.2	4,595	3,323	72.3	4,258	2,799	65.7
2021年	20,471	15,596	76.2	5,829	5,066	86.9	5,704	4,430	77.7	4,812	3,432	71.3	4,126	2,668	64.7
2022年	20,951	13,398	63.9	5,844	4,716	80.7	5,737	3,664	63.9	5,058	2,922	57.8	4,312	2,096	48.6
2023年	21,525	13,201	61.3	5,743	4,583	79.8	5,869	3,489	59.4	5,462	3,070	56.2	4,451	2,059	46.3
2024年	19,866	12,242	61.6	5,866	4,487	76.5	5,279	2,916	55.2	4,853	2,849	58.7	3,868	1,990	51.4

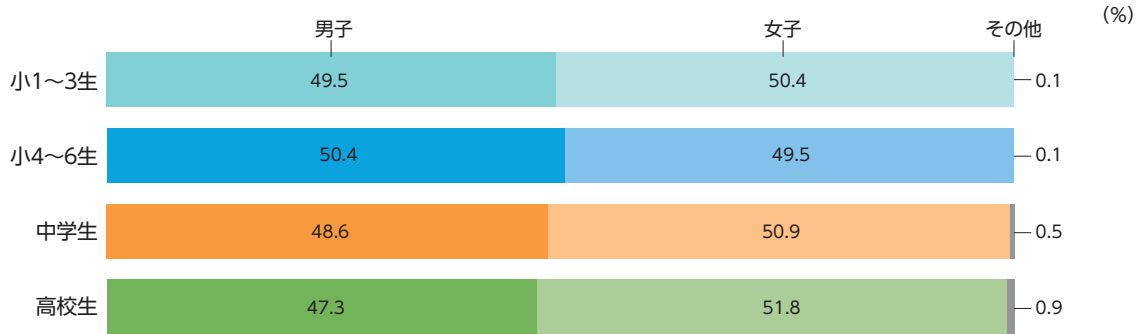
※本冊子では、各調査年の有効回答を分析対象としている。①親もしくは子どもの片方回答(小4～高3生)、②学年の回答が親と子で不一致、③調査発送時の学年と回答学年が不一致、④「在学していない」と回答したケースは、有効回答から除外している。

※調査方法の変更に伴い、調査年ごとの違いを同じ条件で比較するため、設問ごとに「無回答・不明」を除いた実回答数を分母として数値の算出を行った。このため、2021年度調査までに発表した数値と異なることがある。

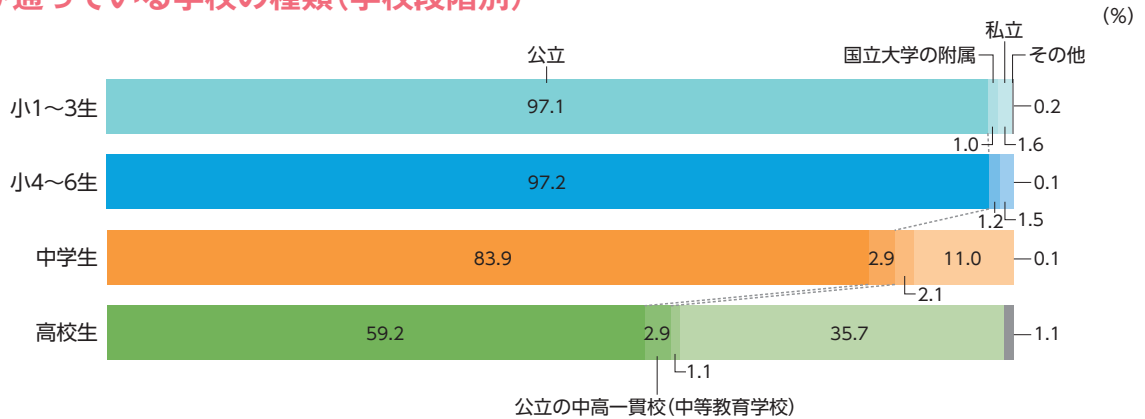
※本冊子の解説文での「小中高校生」は小4～6生、中学生、高校生を指している。「小中学生」に関して、子ども回答の場合は、小4～6生と中学生を指し、保護者回答の場合は、小1～3生、小4～6生、中学生を指す。

基本属性 2024

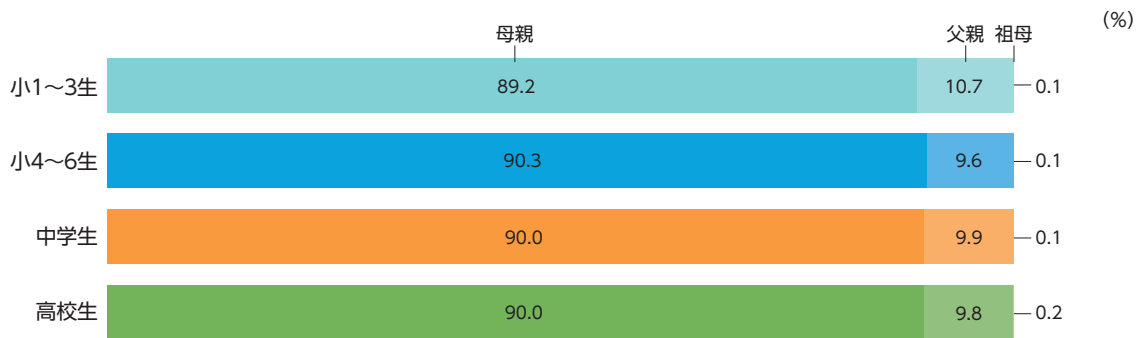
■子どもの性別(学校段階別)



■子どもが通っている学校の種類(学校段階別)

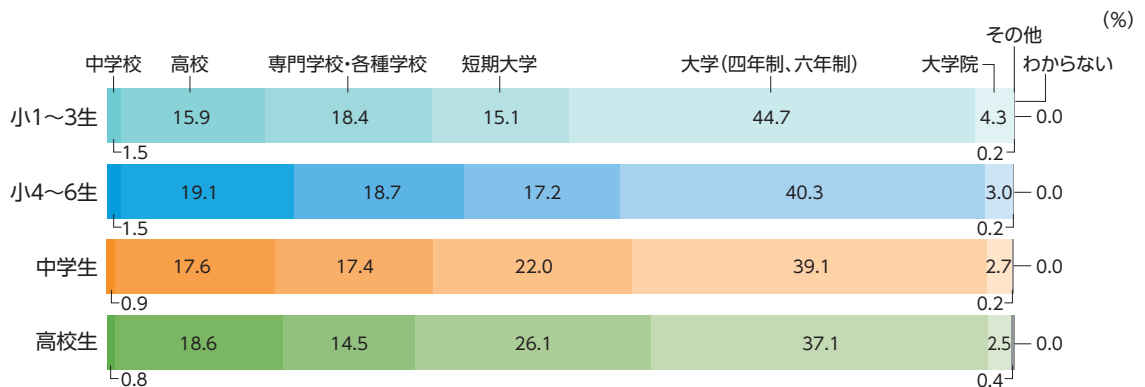


■保護者と子どもとの続柄(学校段階別)



※「祖父」と回答した人はいないため、表示していない。

■母親の最終学歴(学校段階別)



I 子どもの生活の変化

1 メディア時間の増加

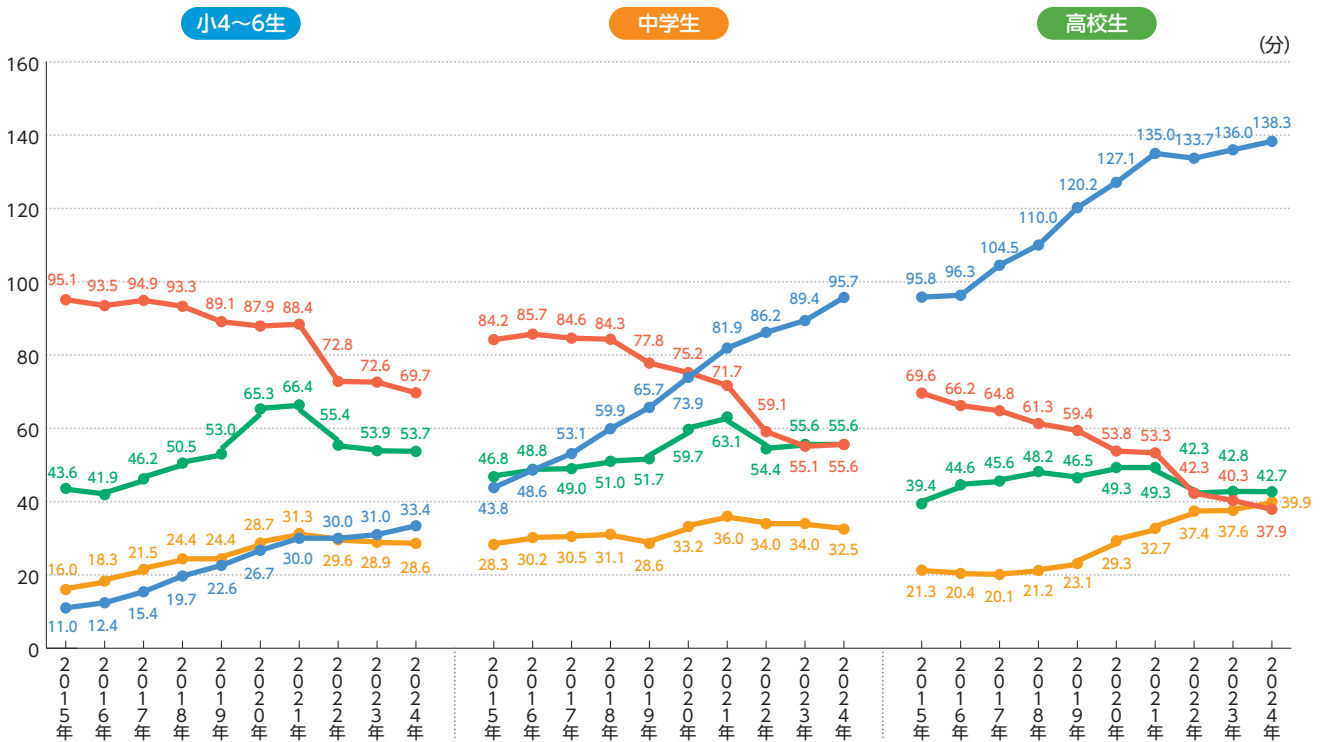
この10年間で、「携帯電話やスマートフォン」の利用時間は増加する一方で、読書時間は減少傾向

2015年から2024年にかけて、子どもたちのメディアの利用時間は「テレビやDVDを見る」を除き、全体的に増加しており、携帯電話やスマートフォンの利用時間は小4～6生で約22分、中学生で約52分、高校生で約43分増加した。また、パソコンやタブレットの利用時間は小4～6生で約13分、中学生で約4分、高校生で約19分増加した。一方で、「本を読む」時間はすべての学校段階で約5分程度減少しており、特に小4～6生の読書時間は16分にまで減少している。これらの変化は、デジタルメディアの普及や生活様式の変化が影響していると考えられる。

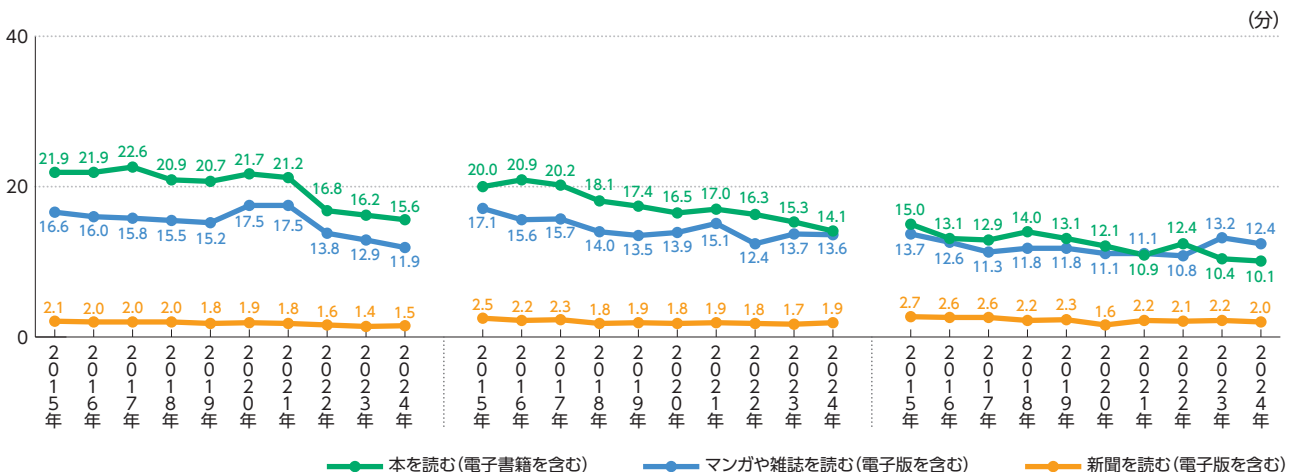
Q あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均していただきたい時間を教えてください。

図1-1-1 メディア時間

子ども回答



● テレビやDVDを見る ● テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ ● 携帯電話やスマートフォンを使う ● パソコンやタブレット(iPadなど)を使う



● 本を読む(電子書籍を含む) ● マンガや雑誌を読む(電子版を含む) ● 新聞を読む(電子版を含む)

注 平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」などと置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。

I 子どもの生活の変化

2 生活習慣

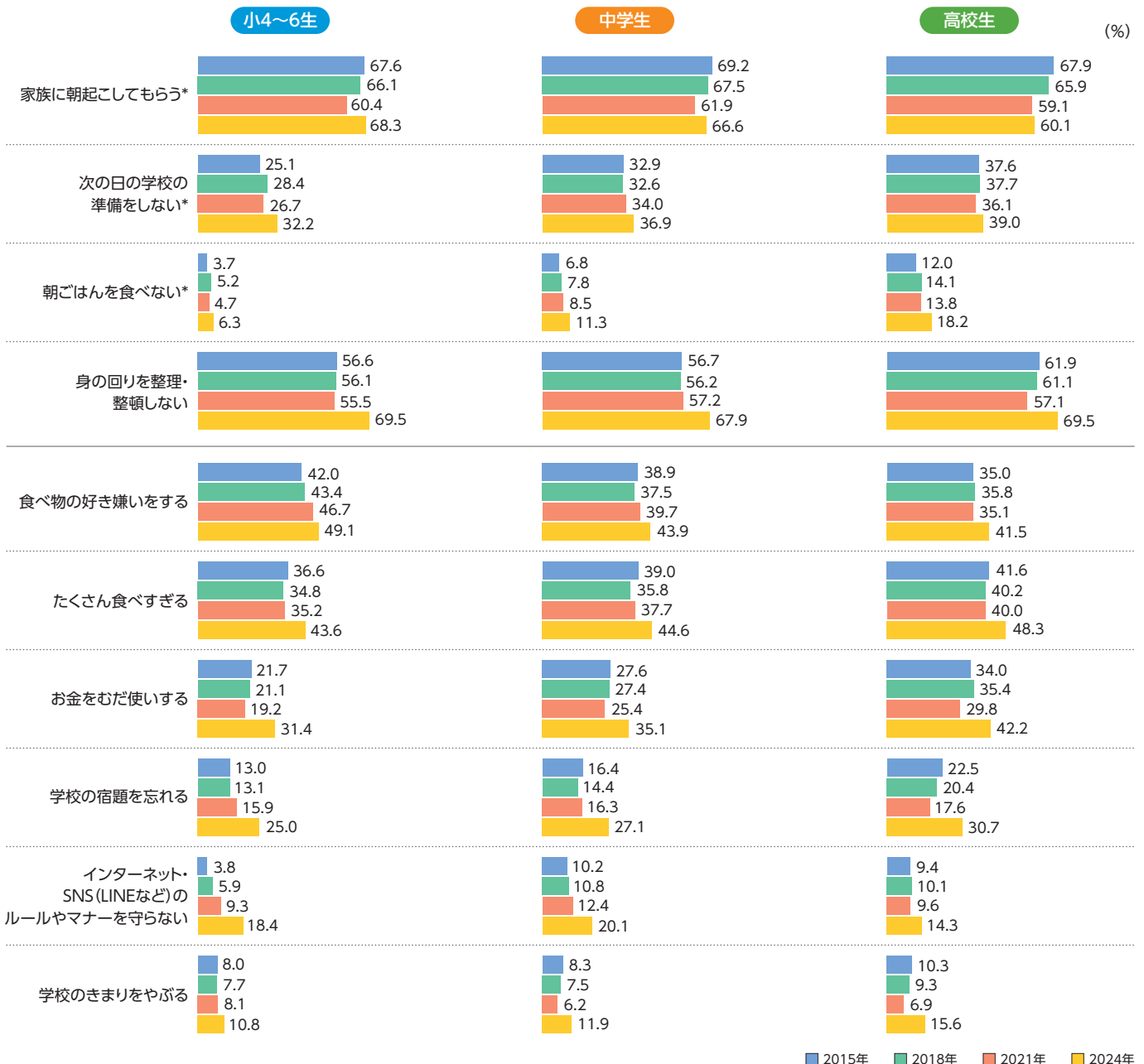
「身の回りを整理・整頓しない」小中高校生が増加

2015年に比べ、「身の回りを整理・整頓しない」「食べ物の好き嫌いをする」「たくさん食べすぎる」「お金をむだ使いする」「学校の宿題を忘れる」「インターネット・SNSのルールやマナーを守らない」について、「ある」（よくある＋ときどきある）と回答した小中高校生は増加傾向にある。さらに、「次の日の学校の準備をしない」（週に4～5日＋週に2～3日）小中学生、「朝ごはんを食べない」「学校のきまりをやぶる」高校生も増加傾向だ。生活習慣全般の乱れがみられた。一方で、「家族に朝起こしてもらおう」高校生は、2015年の約7割から2024年に6割に減少している。

Q ふだんの生活の様子について、次のようなことがどれくらいありますか。

図1-2-1 生活習慣

子ども回答



■ 2015年 ■ 2018年 ■ 2021年 ■ 2024年

注1 *がついている項目は、「週に4～5日＋週に2～3日」の%。それ以外の項目は「よくある＋ときどきある」の%。
 注2 *がついている項目は、学校がある日のことについて答えてもらっている。
 注3 生活習慣に関する14項目のうち、いずれか1つ以上の学校段階で2015年の数値と比べて5ポイント（「週に4～5日＋週に2～3日」、あるいは「よくある＋ときどきある」）以上増減している項目のみを図示した。

I 子どもの生活の変化

3 親子の会話

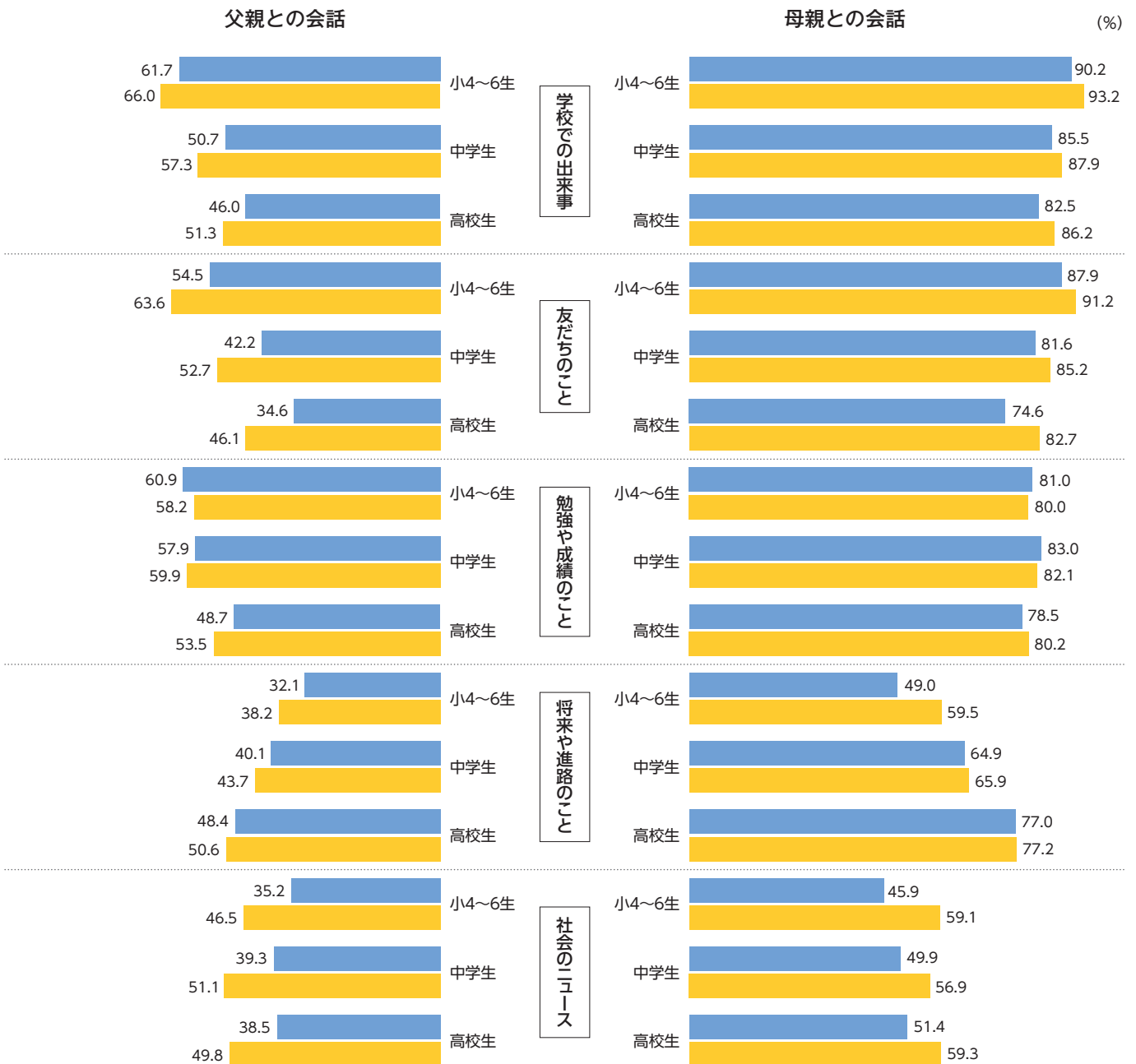
父親・母親との会話は全体的に増加

2015年と比較して2024年は、小中高校生の親子の会話は全体的に増加した。特に父親・母親と「社会のニュース」「将来や進路のこと」(小4～6生)について会話する割合が増加している。また父親との会話では、「友だちのこと」と回答した小中高校生、「学校での出来事」と回答した中学生が増加した。依然としていずれの学校段階でも、父親より母親との会話が多い傾向ではある。しかし、父親との会話のほうが増加幅が大きく、勉強や将来のことより社会や学校での出来事、子どもの友だち関係についての会話が増えた。子どもとのコミュニケーションに熱心な保護者の姿が垣間みえる。

Q ふだん、お父さんやお母さんと、次のことについてどれくらい話をしますか。

図1-3-1 親子の会話

子ども回答



■ 2015年 ■ 2024年

注 「よく話す+ときどき話す」の%。

I 子どもの生活の変化

4 人とのかかわり

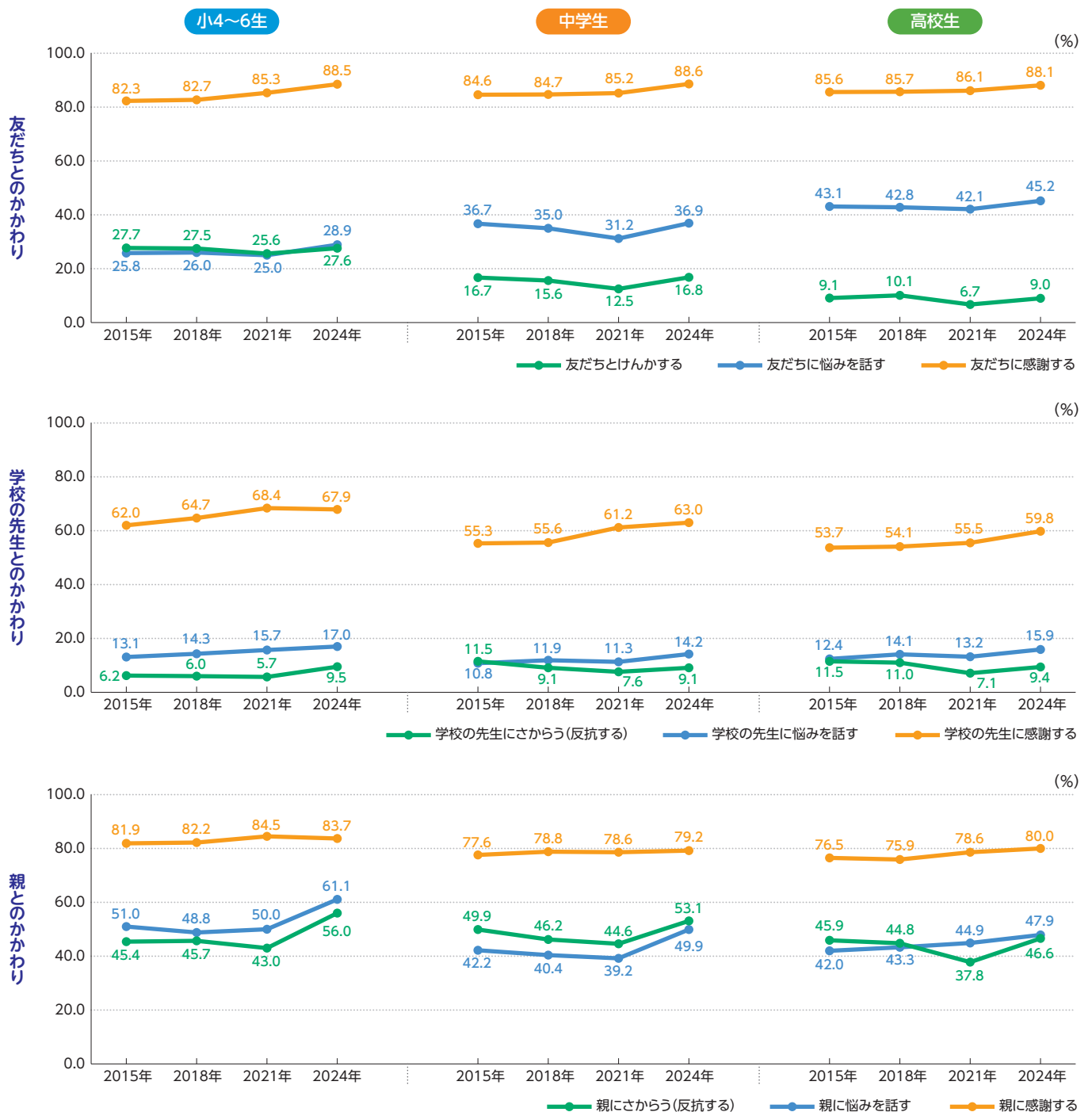
「親に悩みを話す」小中高校生が増加

人とのかかわりについて、2015年からの変化をみると、「親に悩みを話す」や「学校の先生に感謝する」ことが「ある」(よくある+ときどきある)と回答した小中高校生が増加している。また、「友だちに感謝する」や「親にさからう」ことも、小4～6生で増加傾向にある。友だちや学校の先生、親との関係において、「けんかする」「さからう」「悩みを話す」といったことよりも「感謝する」が多いという傾向や、学校段階が上がるにつれて「友だちとけんかする」よりも、「友だちに悩みを話す」が多くなるという傾向は変わっていない。

Q いろいろな人とのかかわりについて、次のようなことがどれくらいありますか。

図1-4-1 人とのかかわり

子ども回答



注 「よくある+ときどきある」の%。

I 子どもの生活の変化

5 お手伝い

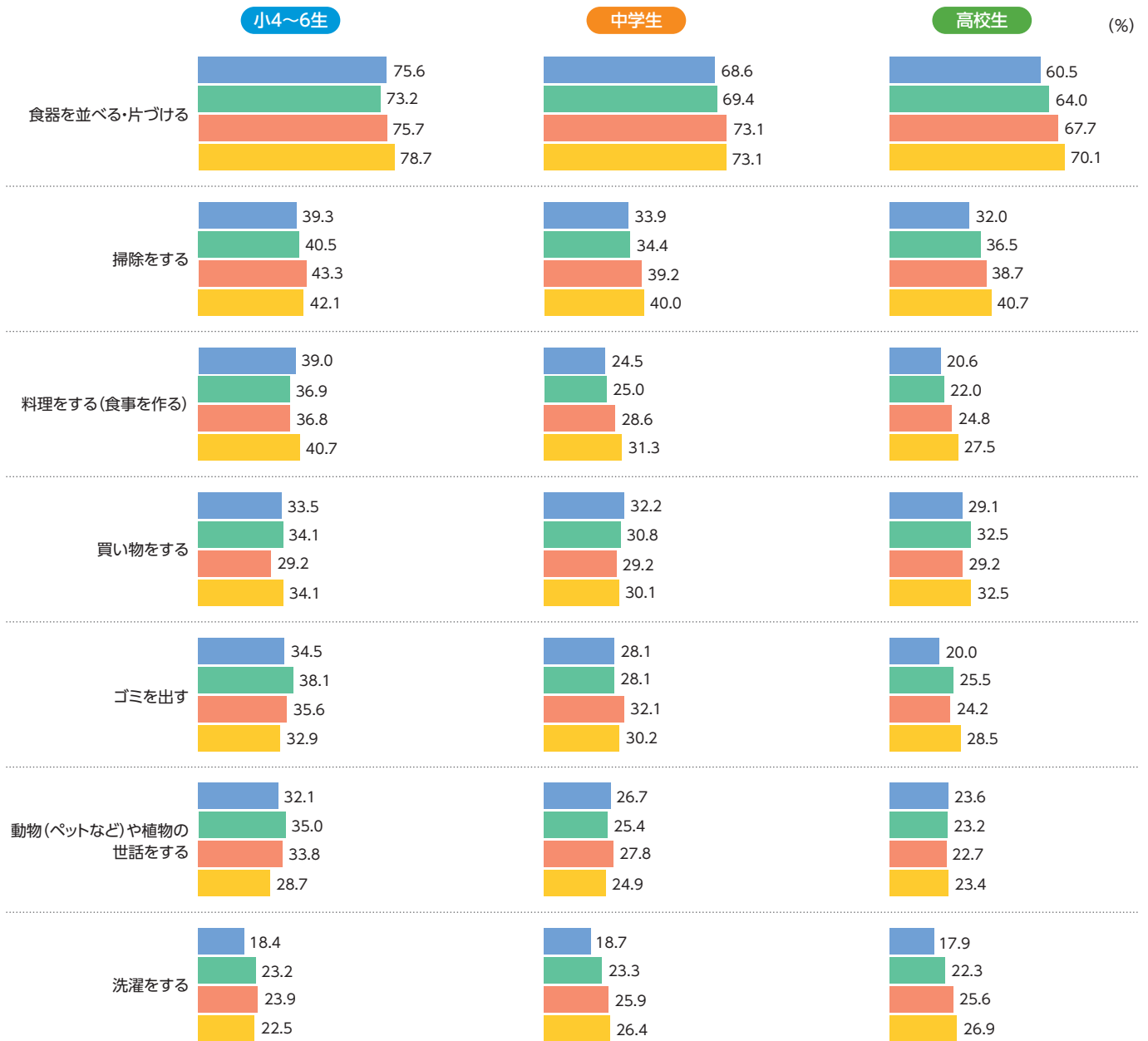
家のお手伝いをする高校生が増加

家の仕事やお手伝いについての結果をみると、2015年と比較して、全体的に「する」(よくする+ときどきする)と回答した小中高校生が増加し、家でよくお手伝いをしている小中高校生の姿がうかがえる。また、学校段階が上がるにつれて、経年での増加幅が大きくなる傾向がみられた。特に「食器を並べる・片づける」「洗濯をする」「掃除をする」「ゴミを出す」高校生の割合がそれぞれ9ポイント前後増加し、小中学生との差が縮まっている。さらに性別にみると、これまでの調査結果と同様に、「ゴミを出す」のみ、どの学校段階でも男子は女子より「する」割合が高く、それ以外は、女子のほうがお手伝いを「する」割合が高いという特徴がみられた(性別の図は省略)。

Q あなたは、次のような家の仕事やお手伝いをどれくらいしていますか。

図1-5-1 お手伝い

子ども回答 (%)



■ 2015年 ■ 2018年 ■ 2021年 ■ 2024年

注1 「よくする+ときどきする」の%。

注2 2024年の小4~6生の数値の降順に示す。

I 子どもの生活の変化

6 遊び場

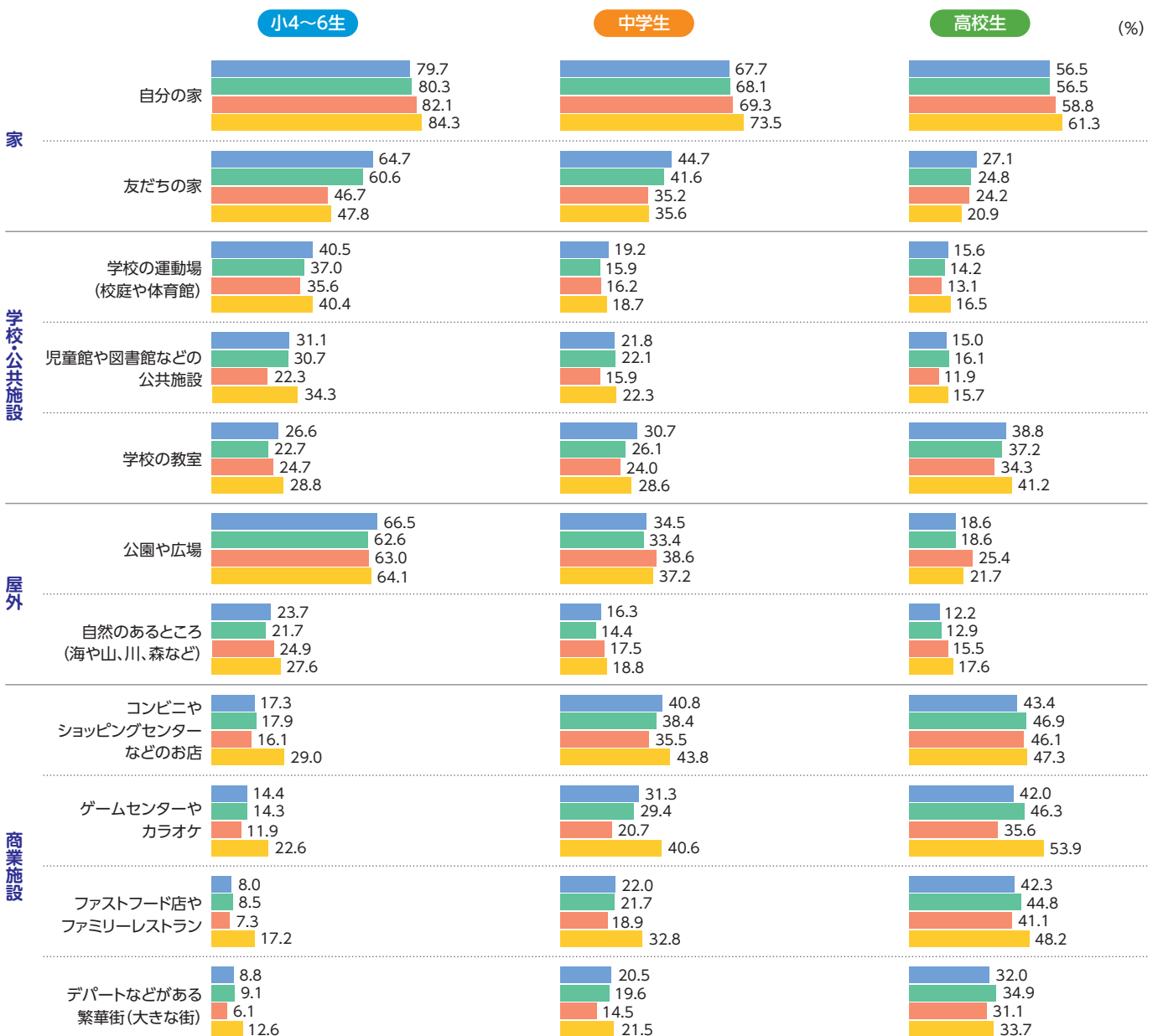
商業施設で遊ぶ小中高校生が増加

小中高校生に遊び場についてたずねたところ、2015年から2024年にかけて「友だちの家」で遊ぶ小中高校生が減少した。特に学校段階が低いほど減少幅が大きく、小4～6生では2015年の6割から約17ポイント減少し、5割弱にまで下がった。一方、いずれの学校段階でも「ゲームセンターやカラオケ」や「ファストフード店やファミリーレストラン」といった商業施設で遊ぶ割合が増加している。また、小4～6生では「コンビニやショッピングセンター」で遊ぶ割合が増加し、約3割に達した。そのほか、いずれの学校段階でも「自分の家」で遊ぶ割合が微増しており、高校生では「自然のあるところ」で遊ぶ割合も増加している。

Q あなたは、放課後や休日に、次のような場所で遊ぶことがどれくらいありますか。
(自分1人で遊ぶときも含めてください)

図1-6-1 放課後や休日の遊び場

子ども回答



■ 2015年 ■ 2018年 ■ 2021年 ■ 2024年

注1 「よく遊ぶ+ときどき遊ぶ」の%。

注2 遊び場の分類ごとに、2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

I 子どもの生活の変化

7 1年間の経験

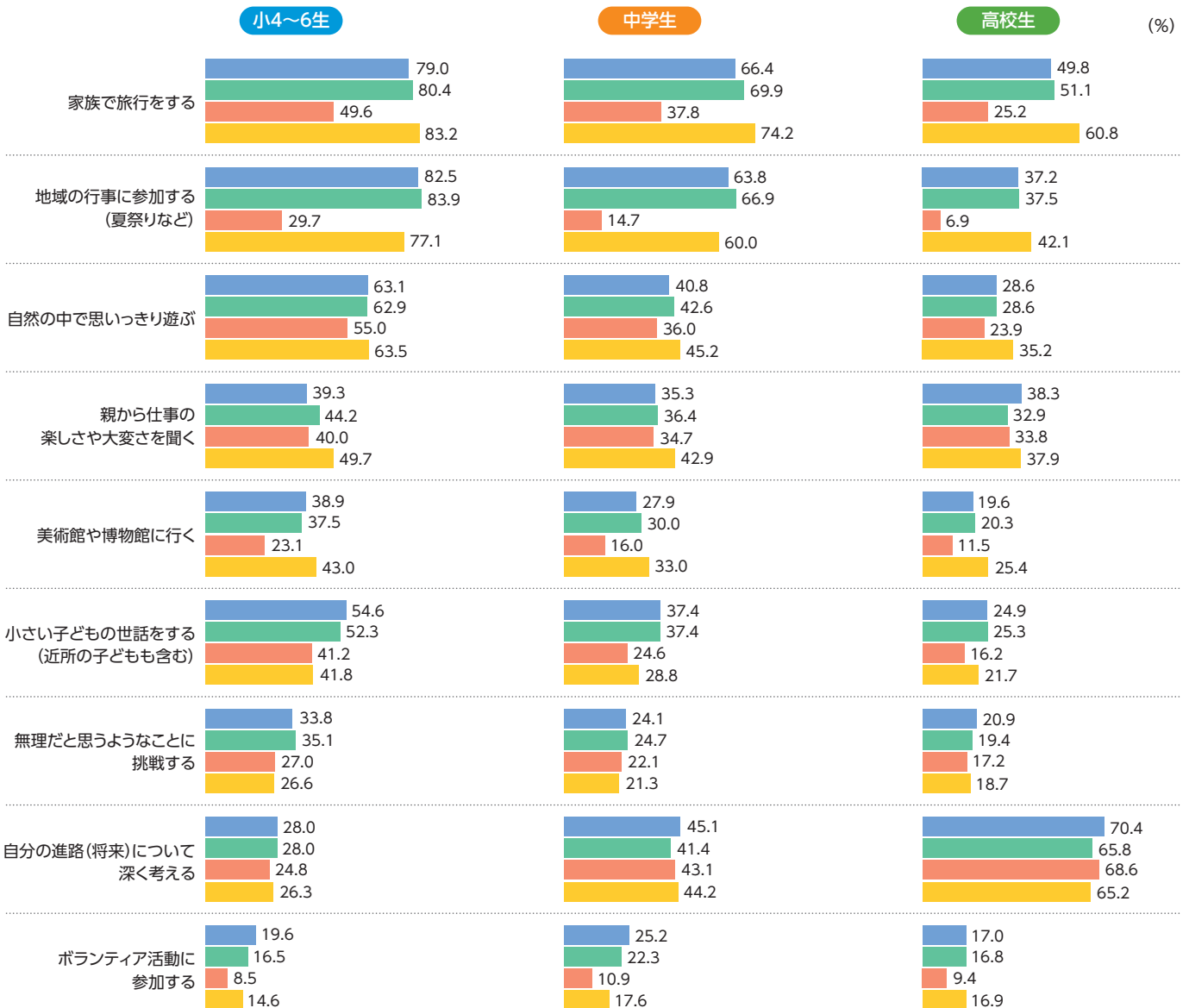
「家族で旅行をする」中高生が増加

1年間の経験について、2015年から2024年にかけての変化(新型コロナウイルス感染症が流行した2021年を除く)をみると、小中学生では「親から仕事の楽しさや大変さを聞く」経験の割合が増加した。一方で、「小さい子どもの世話をする」や「ボランティア活動に参加する」経験は減少した。また、小4～6生では「無理だと思うようなことに挑戦する」「地域の行事に参加する」経験も減少した。中高生では、「美術館や博物館に行く」「自然の中で思いっきり遊ぶ」経験が若干増加した。全般的に、これまでの調査結果と同様に、中高生に比べて小4～6生のほうがより多様な経験をしている傾向がある(「自分の進路(将来)について深く考える」や「ボランティア活動に参加する」を除く)。しかし、この10年間で小4～6生の経験した割合の下がり幅が大きい項目が多い。

Q この1年くらいの間に、あなたは次のようなことを経験しましたか。
経験したことがあるものをすべてお選びください。

図1-7-1 1年間の経験

子ども回答



注1 複数回答。

■ 2015年 ■ 2018年 ■ 2021年 ■ 2024年

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 1年間の経験に関する16項目のうち、いずれか1つ以上の学校段階で2015年の数値と比べて5ポイント以上増減している項目のみを図示した。

注4 2015年調査でたずねていない項目を分析から除外した。

I 子どもの生活の変化

8 自己認識

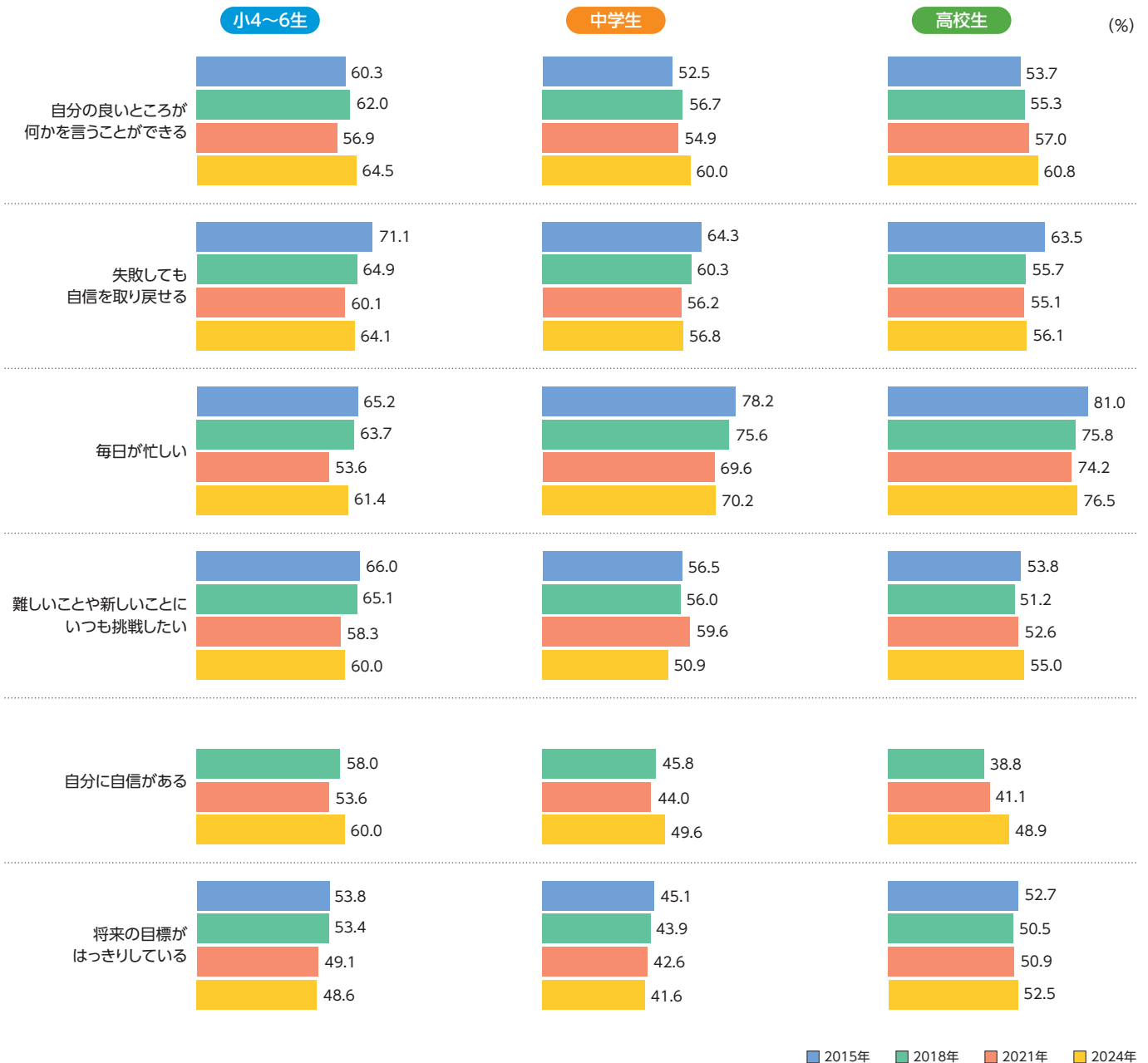
「失敗しても自信を取り戻せる」小中高校生が減少

小中高校生の自己認識については、いずれの学校段階でも「失敗しても自信を取り戻せる」と回答した割合が減少している。一方で、「自分の良いところが何かを言うことができる」という回答は、小4～6生で4ポイント、中高生で7ポイントぐらゐの増加を示し、自己肯定感が高まっている。また、「自分に自信がある」という認識は中高生ともに5割弱であるが、高校生は2018年に比べて10ポイントの増加がみられた。小中学生では「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい」という意欲や、小4～6生の「将来の目標がはっきりしている」という回答の割合が減少した。さらに、「毎日が忙しい」と感じる子どもは減少し、とくに中学生では2015年の約8割から2024年には7割になった。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図1-8-1 自己認識

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。
 注2 「自分に自信がある」は2015年調査ではたずねていない。
 注3 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

Ⅱ 子どもの学びの変化

1 学習時間の変化

小中高校生の学習時間が全体的に減少

2015年から2024年にかけての学習時間の推移を分析すると、全体的に学習時間の総計(学校の宿題+学校の宿題以外の勉強+学習塾での勉強)が減少していることがわかる。学校段階が上がるにつれ減少幅が大きく、小4～6生は13分、中学生は14分、高校生は17分の減少がみられた。特に「学校の宿題をする」時間は、小4～6生で10分、中学生で9分、高校生で12分減少し、それぞれ34分、40分、42分となった。また、「学校の宿題以外の勉強をする」時間も小4～6生で3分、中学生で6分、高校生で5分の減少が確認された。これに対して「学習塾での勉強」時間は、小中高校生すべてがほぼ横ばいで推移している。このように、学習時間全体の減少は学校の宿題の減少が大きく影響していると考えられる。

Q あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。
学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均してだいたい時間を教えてください。

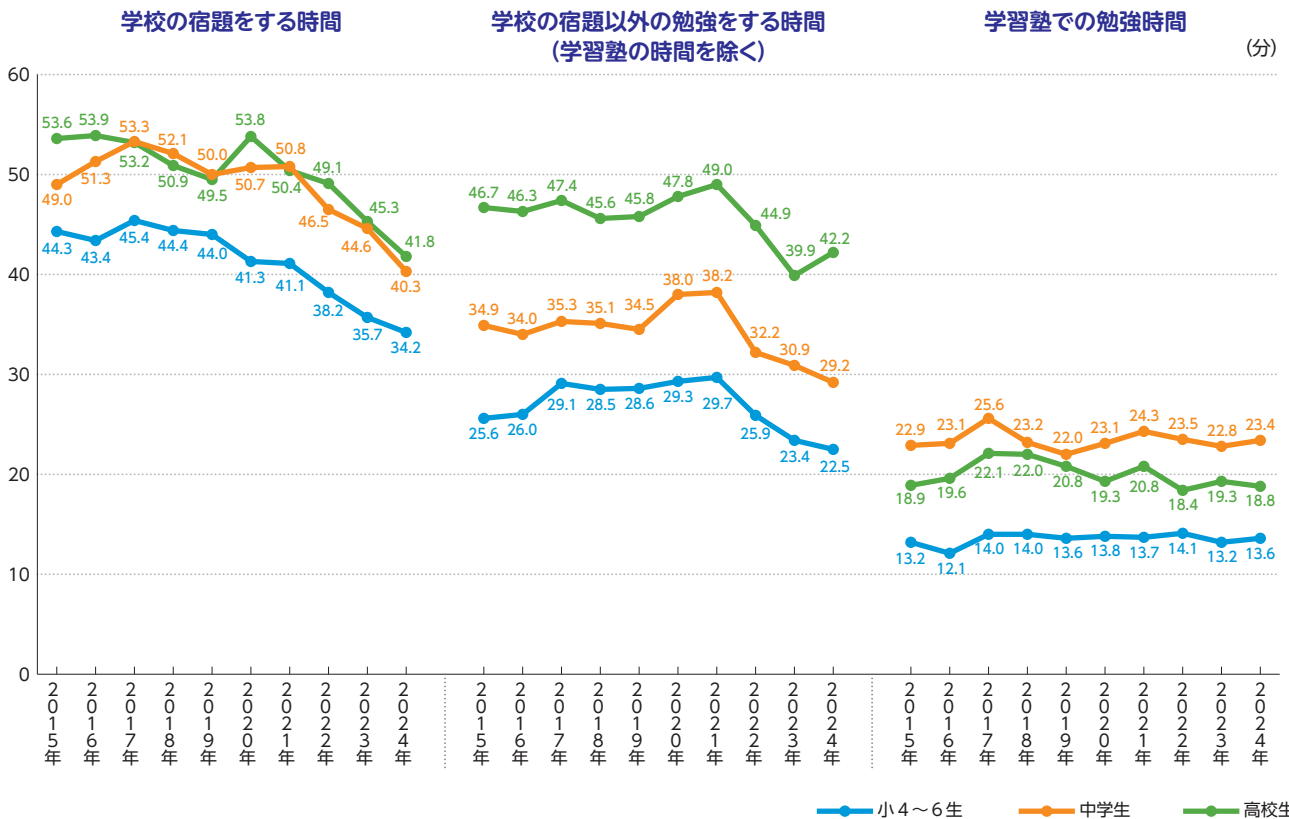
図2-1-1 学習時間

子ども回答

学習時間の総計

(分)

	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
小4～6生	82.9	81.3	88.3	86.7	86.4	84.5	84.3	78.2	72.3	70.3
中学生	106.9	108.5	113.9	110.3	106.9	111.7	113.0	102.1	98.3	92.9
高校生	119.4	119.4	123.2	118.5	116.5	120.7	119.9	112.4	104.5	102.8



注1 「学校の宿題をする時間」「学校の宿題以外の勉強をする時間」の平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」などと置き換えて算出。

注2 「学習塾での勉強時間」の平均時間は、「通っていない」と回答した子どもを0分、「通っている」と回答した子どものうち「1日にどれくらいの時間、学習塾で勉強していますか」という質問に対して、「30分」を30分、「1時間」を60分、「4時間」を240分、「4時間以上」を270分のように置き換え、週あたりの通塾回数をかけあわせて7で割って算出。

注3 学習時間の総計は「学校の宿題をする時間」+「学校の宿題以外の勉強をする時間(学習塾の時間を除く)」+「学習塾での勉強時間」の平均時間。

Ⅱ 子どもの学びの変化

2 学校での生活

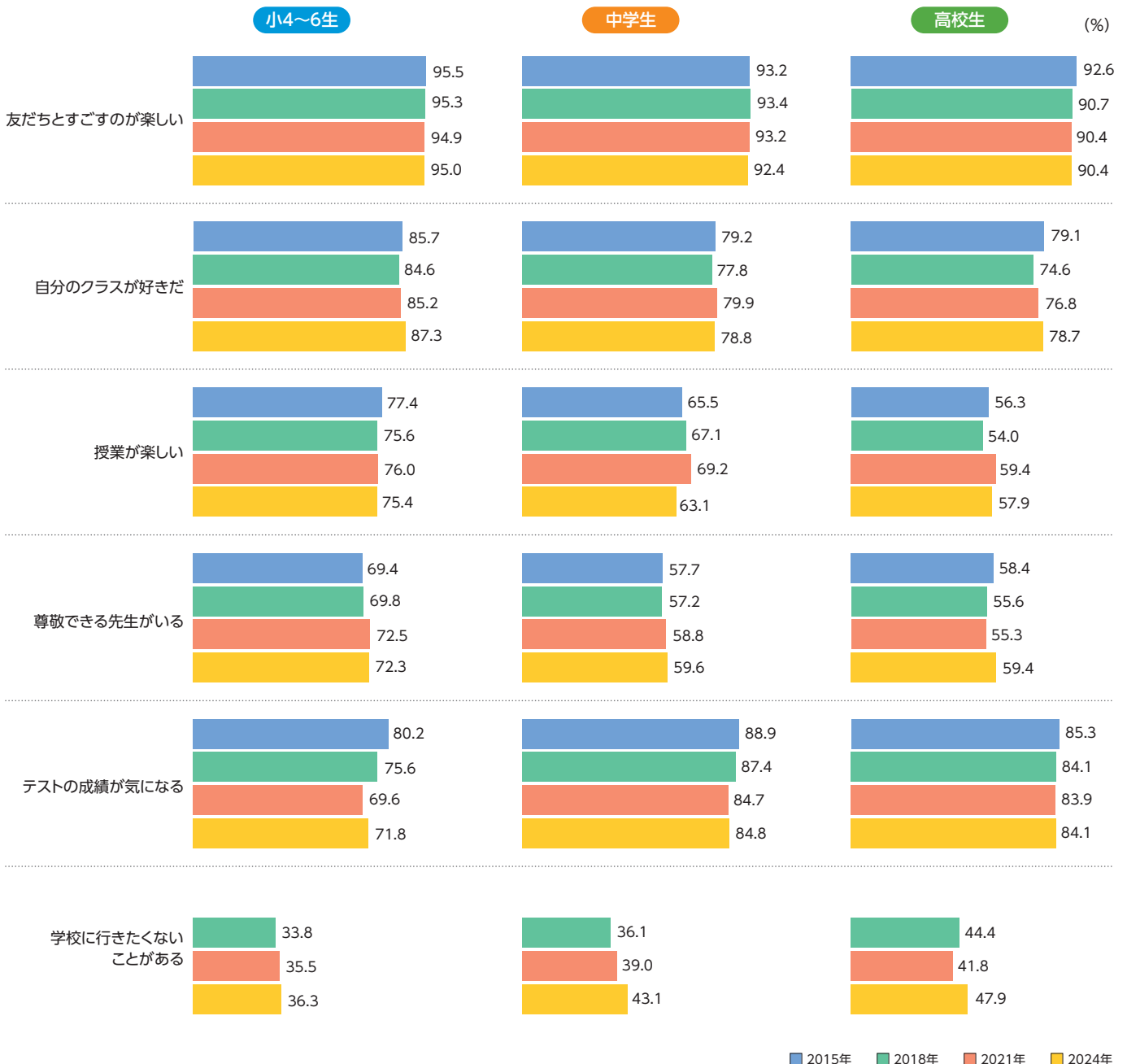
小4～6生で「テストの成績が気になる」が減少

学校での生活についての結果をみると、「テストの成績が気になる」と回答した小4～6生は、2015年の8割から2024年には7割に減少した。中学生は小4～6生より減少幅が小さいが、9割弱から8割となった。テストの成績への関心は依然として高いが、やや薄れていることがわかる。一方、「学校に行きたくないことがある」という回答では、中学生が2018年に比べて7ポイント増加し、4割に上った。高校生もわずかに増加している。全体的にみると、2015年から「友だちとすごすのが楽しい」と感じる割合は変わっておらず、いずれの学校段階でも9割を超えていて、もっとも高い結果となっている。

Q 学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図2-2-1 学校での生活

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 「学校に行きたくないことがある」は、2015年調査ではたずねていない。

Ⅱ 子どもの学びの変化

3 学習意欲・学習方法の理解

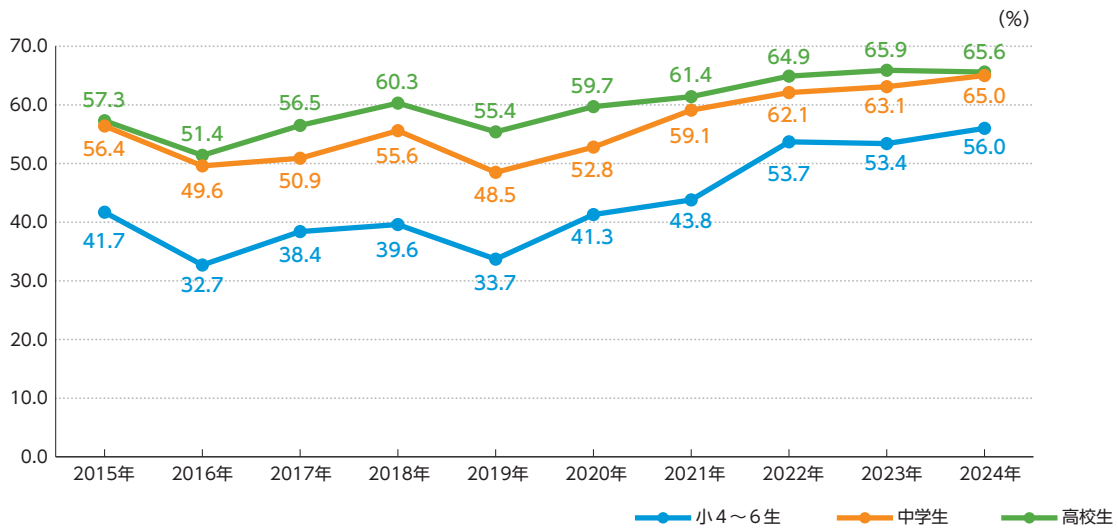
小4～6生で「上手な勉強のしかたがわからない」が増加

学習意欲についてたずねたところ、「勉強しようという気持ちがわからない」と感じる小中高校生の割合は増加傾向にある。学校段階が上がるにつれて学習意欲が低下する傾向は変わらないが、2015年と比較して小4～6生の増加幅が大きく、2015年の4割から2024年には6割弱になった。また、学習方法に対する理解についても聞いたところ、2016年に比べ「上手な勉強のしかたがわからない」と回答した小中高校生が増加傾向にある。これまでの調査結果と同様に、学校段階が上がるほど「あてはまる」（とてもあてはまる+まああてはまる）と回答した割合が高いが、2016年に比べ学校段階が低いほど「あてはまる」とした割合が増加していることが特徴であり、小4～6生でも上手な勉強方法がわからなくて悩む子どもは多い。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図2-3-1 「勉強しようという気持ちがわからない」の割合

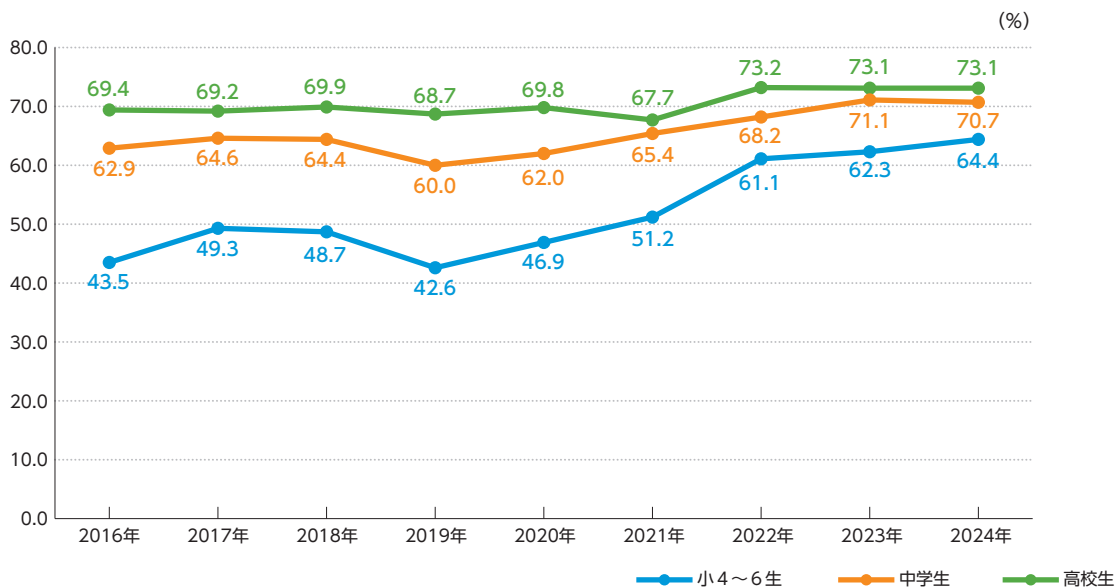
子ども回答



注 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

図2-3-2 「上手な勉強のしかたがわからない」の割合

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

注2 この質問は2015年調査でははたずねていない。

Ⅱ 子どもの学びの変化

4 勉強や教科の好き嫌い

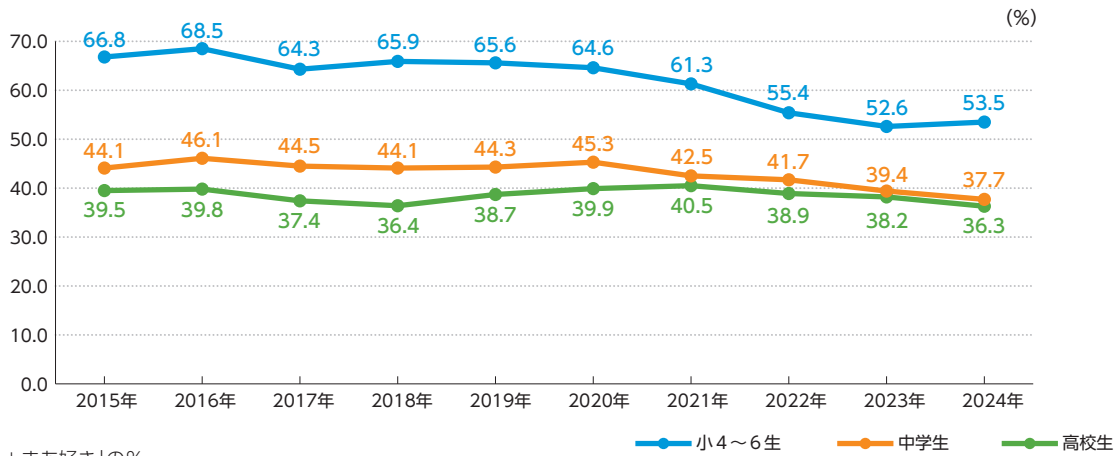
「英語」が「好き」な小中高校生が減少

勉強の好き嫌いについてたずねた結果をみると、2015年から2024年にかけて、勉強が「好き」(とても好き+まあ好き)と回答した小中学生の割合が大きく減少している。特に小4～6生では、2015年の約7割から2024年には5割にまで下がり、その減少幅は顕著である。教科別にみると、「英語/外国語活動/外国語」が「好き」と回答した小中学生は2021年に大きく落ち込み、その傾向は2024年にも続いている。また、小4～6生の「算数」と中学生の「国語」についても、「好き」と回答した割合がそれぞれ5ポイント以上減少している。全体的に、2015年に比べて勉強や教科が「好き」と感じる小中高校生の割合が減少したといえる。

Q あなたは「勉強」がどれくらい好きですか。

図2-4-1 勉強が「好き」な割合

子ども回答

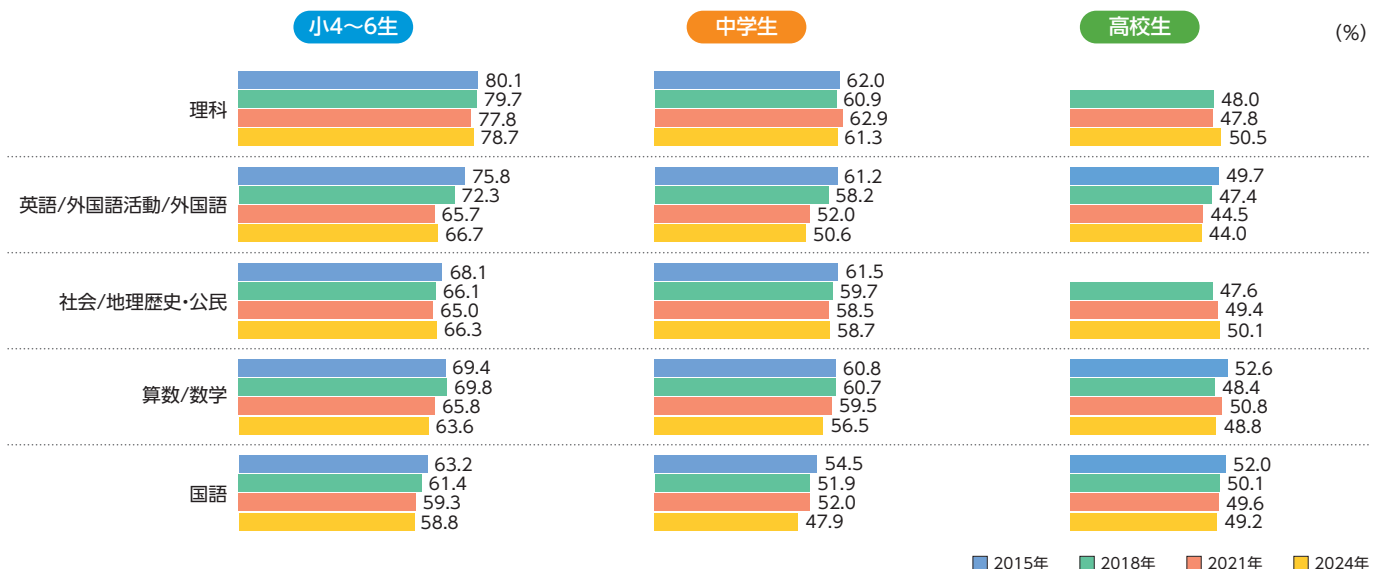


注 「とても好き+まあ好き」の%。

Q あなたは、次の教科がどれくらい好きですか。

図2-4-2 教科が「好き」な割合

子ども回答



注1 「とても好き+まあ好き」の%。

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 高校生では、理科や社会のように複数の科目からなる教科は、平均してだいたいを答えてもらっている。

注4 高校生に対して、2015年調査では「理科」「地理歴史・公民」をたずねていない。

Ⅱ 子どもの学びの変化

5 文理意識・学習動機

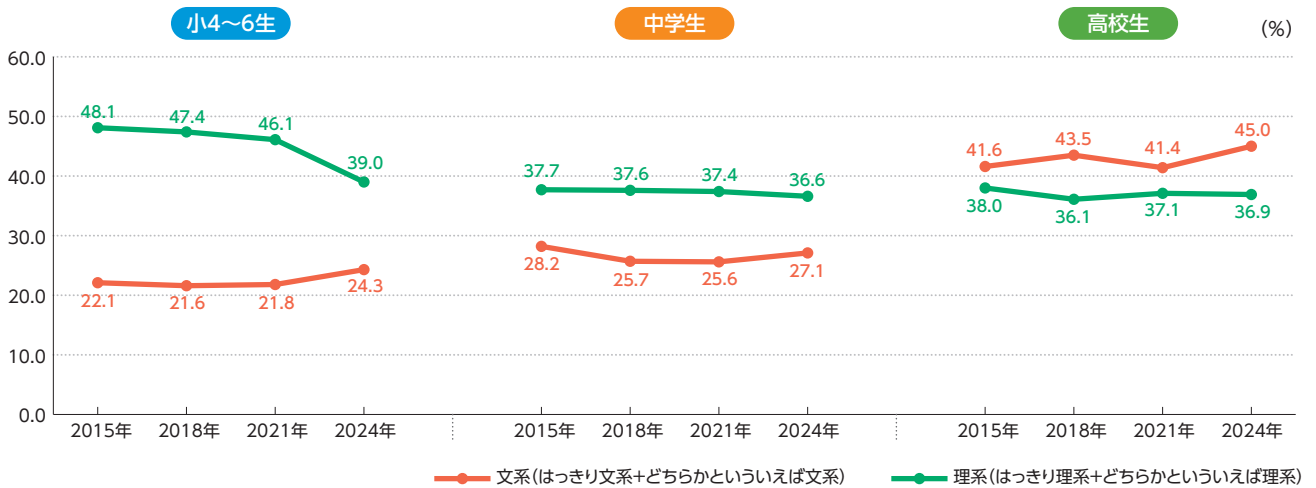
自分のことを「理系」だと思ふ小4～6生が減少

文系・理系に対する自己認識の変化をみると、小4～6生の「理系」（はっきり理系+どちらかといえば理系）と考える割合は2015年から2024年にかけて減少し、約5割から4割弱になった。一方、高校生の「文系」（はっきり文系+どちらかといえば文系）と考える割合はわずかに増加した。学習動機については、2018年に比べ2024年に「先生や親にしかられたくないから」と回答した小中高校生が増加した。しかし、「自分の希望する（高校や）大学に進みたいから」といった動機で勉強する小中学生は減少傾向にあり、「将来なりたい職業につきたいから」という理由で勉強する小4～6生も若干減少した。このことから、外的動機が強まっている小中学生の姿がうかがえる。一方で、高校生では「新しいことを知るのがうれしいから」といった内発的動機で勉強する割合が2018年に比べて増加したこともわかった。

Q あなたは自分のことを「文系」だと思ひますか、それとも「理系」だと思ひますか。

図2-5-1 文理意識

子ども回答

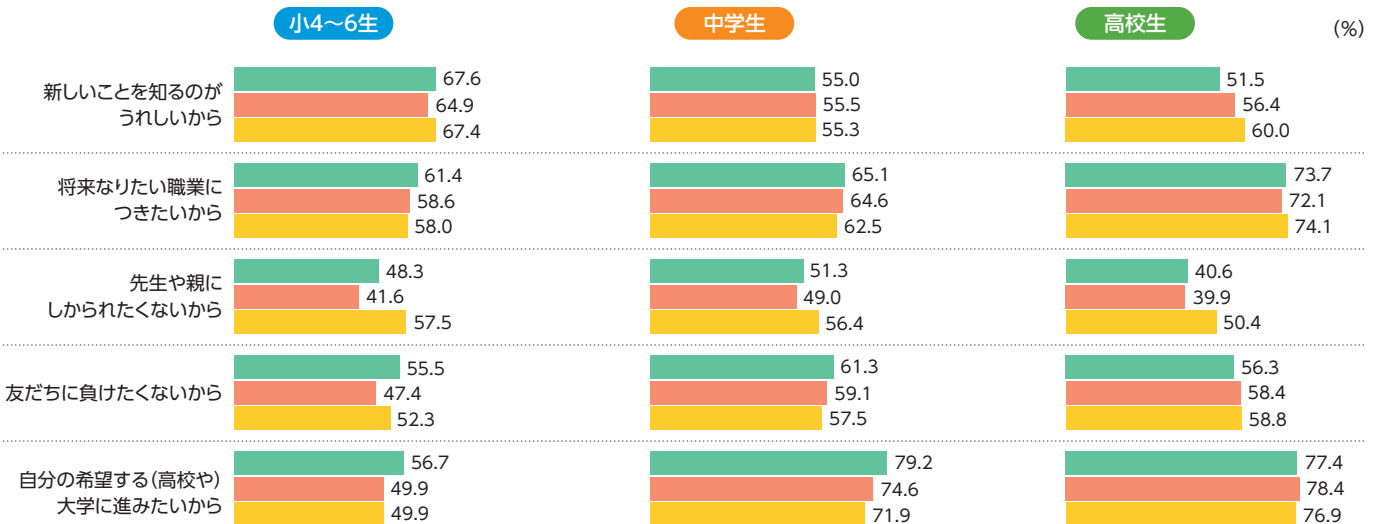


注 「どちらともいえない」「よくわからない」は図から省略した。

Q あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図2-5-2 学習動機

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 この質問は2015年調査でははたずねていない。

Ⅱ 子どもの学びの変化

6 学習方略

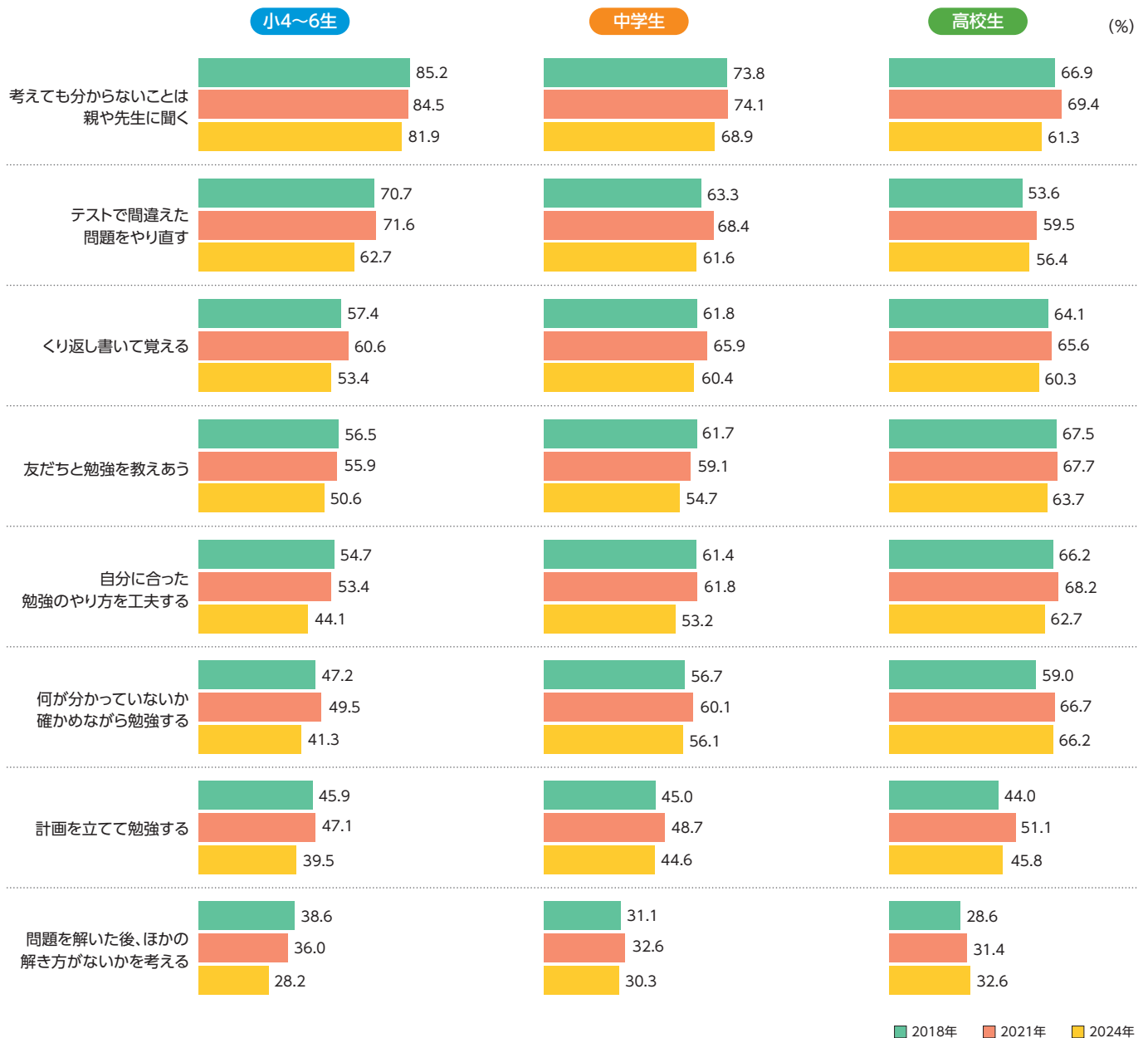
「自分に合った勉強のやり方を工夫する」小中学生が減少

勉強における学習方略の結果をみると、2018年に比べいずれの学校段階でも「する」（よくする＋ときどきする）と回答した割合が減少傾向にあることがわかる。特に小4～6生では、2018年から2024年にかけて顕著な減少がみられた。具体的には、「自分に合った勉強のやり方を工夫する」が5割から4割に、「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」が4割弱から3割弱に、「テストで間違えた問題をやり直す」が7割から6割に減少した。また、「友だちと勉強を教えあう」「何が分かっていないか確かめながら勉強する」といった方略を用いる小4～6生も減少傾向にある。全般的に、小4～6生は深い処理に関する方略を含め、学習方略の使用が低下している。一方で、中学生では「考えても分からないことは親や先生に聞く」が減少したのに対し、「何が分かっていないか確かめながら勉強する」割合は高校生で増加している。

Q あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか。

図2-6-1 学習方略

子ども回答



注1 「よくする＋ときどきする」の%。

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 この質問は2015年調査でははたずねていない。

Ⅱ 子どもの学びの変化

7 得意・苦手(子どもの自己評価)

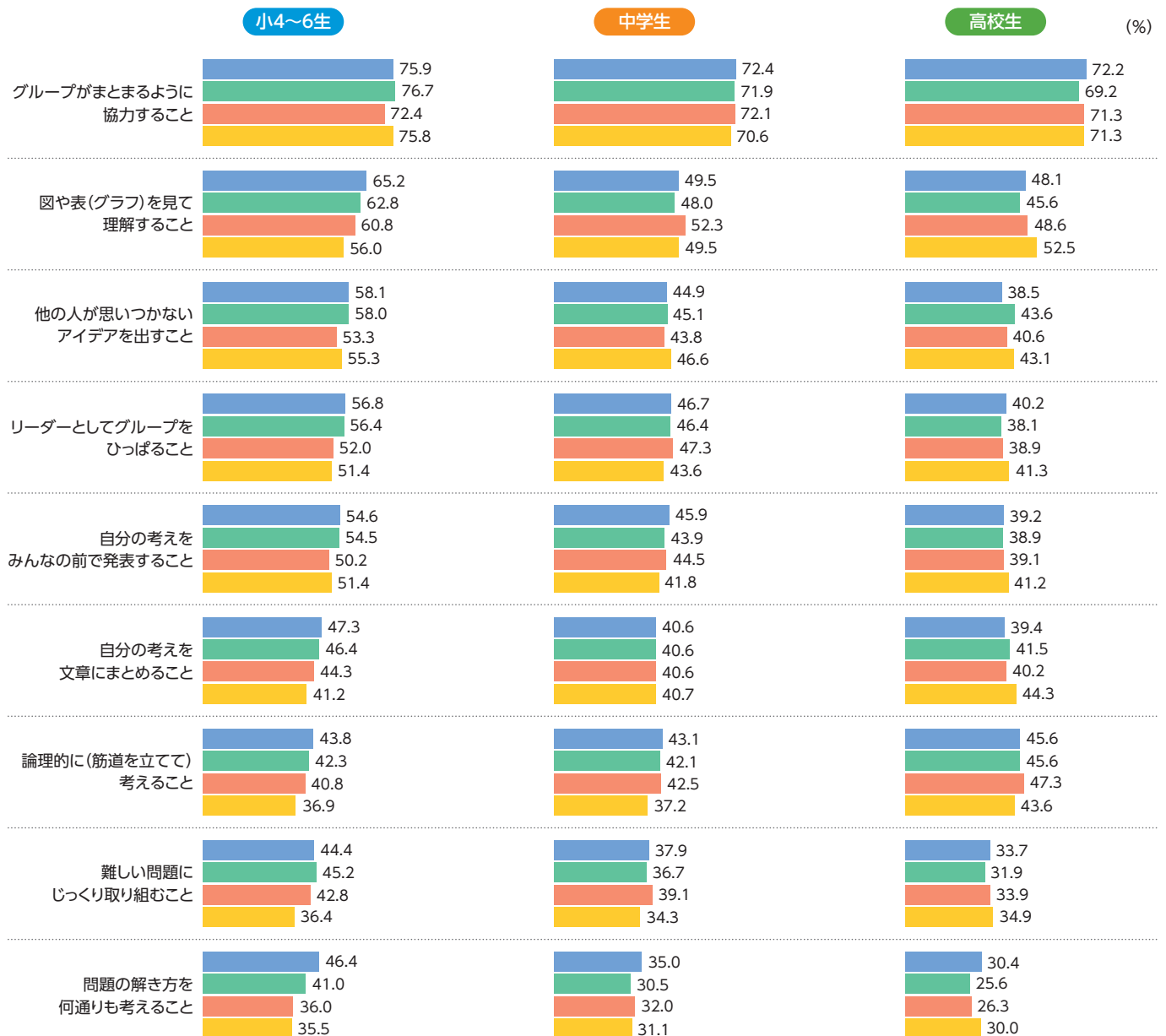
小4～6生は多くの項目で「得意」という自己評価が減少

子どもの得意・苦手についての自己評価に関して2015年から2024年の主な変化をみると、小4～6生では「問題の解き方を何通りも考える」「図や表を見て理解する」「難しい問題にじっくり取り組む」「論理的に考える」「自分の考えを文章にまとめる」「リーダーとしてグループをひっぱる」といった項目で、「得意」(とても得意+やや得意)とする割合が減少した。また、中学生では「論理的に考える」や「自分の考えをみんなの前で発表する」が若干減少した。一方、高校生では「自分の考えを文章にまとめる」「他の人が思いつかないアイデアを出す」ことを「得意」とする割合が若干増加する傾向がみられた。全体的に、小4～6生は、図表を理解する力、グループをひっぱる力、文章にまとめる力、論理的に考える力、じっくり取り組む力、解き方を考える力などに関する自己評価が低下している。

Q あなたは次のようなことが得意ですか、苦手ですか。

図2-7-1 得意・苦手

子ども回答



■ 2015年 ■ 2018年 ■ 2021年 ■ 2024年

注1 「とても得意+やや得意」の%。

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

Ⅱ 子どもの学びの変化

8 デジタル機器の利用①

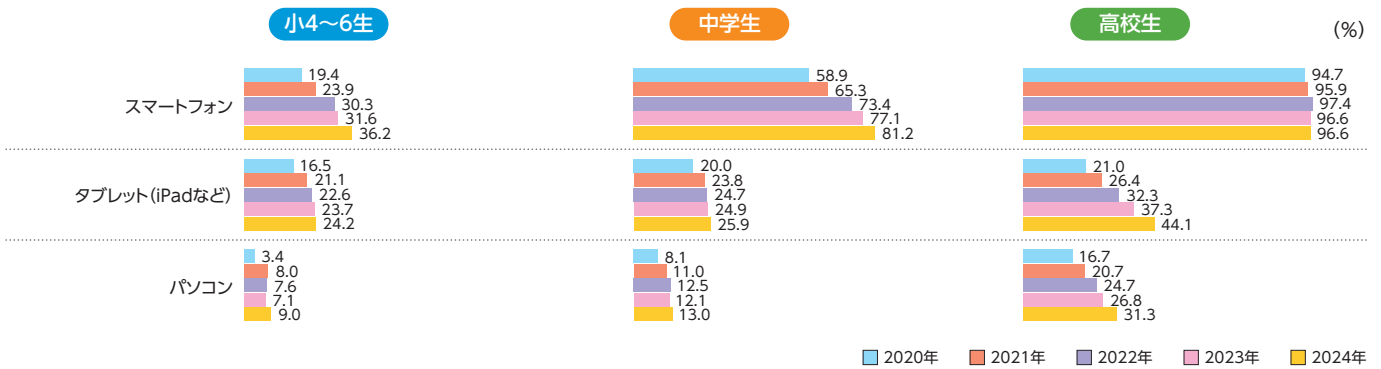
デジタル機器を使って学校の宿題をする小中高校生が増加

小中学生の自分専用のデジタル機器の所持率は、2020年と比較して増加した。特に「スマートフォン」の所持は、小4～6生で約4割、中学生で8割に達した。高校生では「タブレット」の所持率が4割、「パソコン」が3割に増加した。デジタル機器の利用状況を見ると、2024年には学校の宿題をデジタル機器で行う小中高校生が増加した。また、「勉強のことをインターネットで調べる」中高生は90%前後で、小4～6生は75%に達し、2020年から16ポイントの増加をみせた。「メールやSNS（LINEなど）で友だちにわからないところを質問する」小4～6生は2割、中学生は7割弱、高校生は8割弱となり、全体的に頻度が高まっている。さらに、2023年に比べて「学習でAIを使う」中高生の割合も増加しており、デジタル機器を使った学習が浸透しつつあることがうかがえる。

Q あなたは、次のようなデジタル機器を、家で使っていますか。

図2-8-1 「自分の専用のものを使っている」の割合

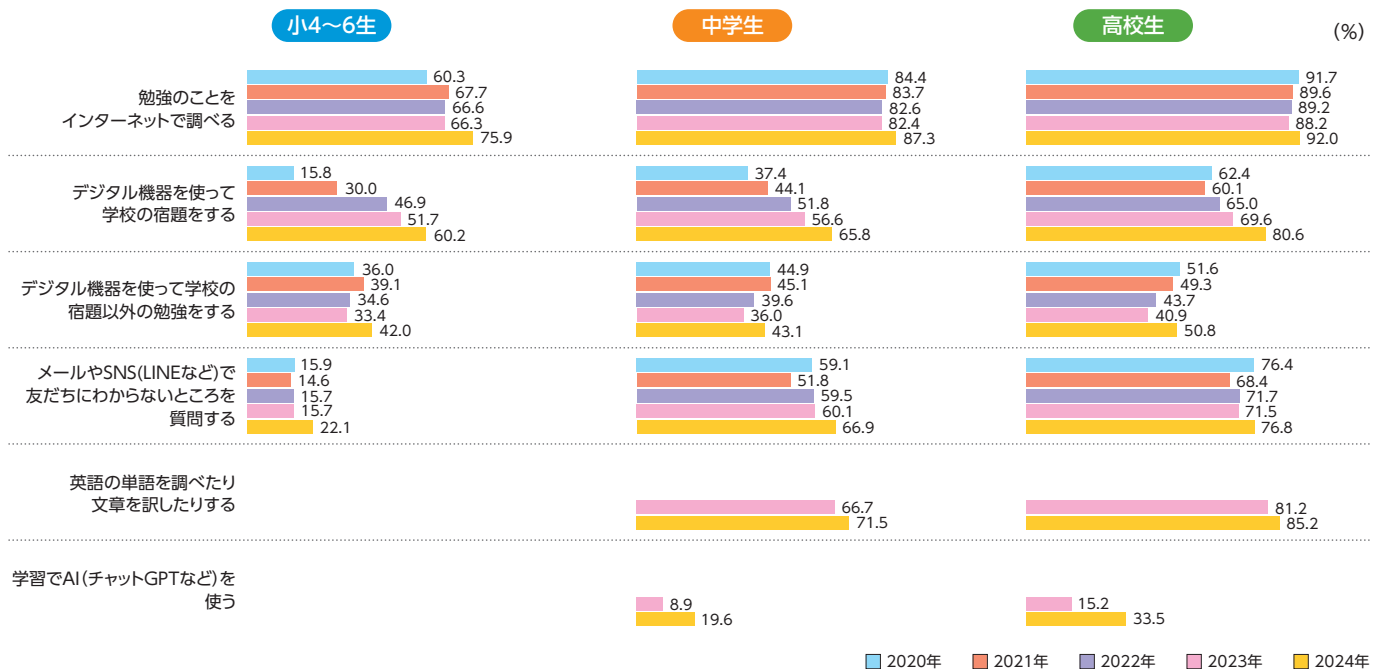
子ども回答



Q あなたはふだん(学校がある日)、次のことをするために、デジタル機器をどれくらい使っていますか。学校の中でやる時間は除いてください。

図2-8-2 デジタル機器の利用状況

子ども回答



注1 「月に1回以下」+「月に2～3回」+「週に1～2回」+「週に3～4回」+「ほぼ毎日」の%。

注2 「英語の単語を調べたり文章を訳したりする」「学習でAIを使う」は、2020年～2022年調査ではたずねていない。

また、小4～6生に対して、2020年～2024年調査ではたずねていない。

II 子どもの学びの変化

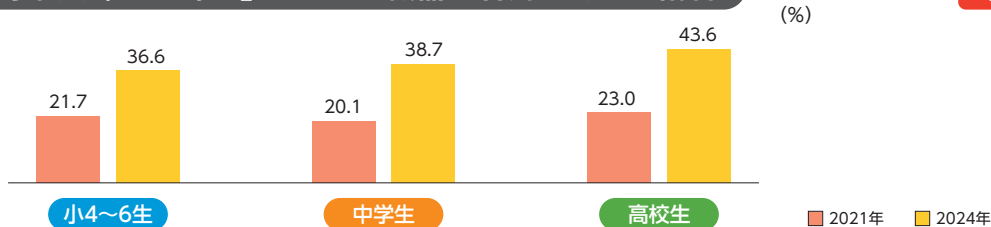
9 デジタル機器の利用②

学校で「ほぼ毎日」デジタル機器を利用している割合は4割前後

学校でのデジタル機器の利用は、2021年に比べて全般的に増加した。特に「友だちと意見を共有する」や「発表用の資料をまとめる」活動は、すべての学校段階で顕著に伸び、6～7割の小中高校生が学校でデジタル機器を活用している。「テストを受ける」割合も増加し、小4～6生は3割、中学生は4割、高校生は5割に達した。「計算や漢字などの問題を解く」は小4～6生、「授業以外で使う」は中学生を中心に増加している。また、「インターネットで学習内容を調べる」は2021年からどの学校段階でも利用のトップとなっている。学校のデジタル機器を「ほぼ毎日」持ち帰る割合も増加し、小4～6生は3割、中学生は4割弱、高校生は5割となった。学校のデジタル機器は利用頻度が高まり、基礎学力の定着や友だちとの学びあい、まとめや発表、情報を収集する力の育成に広く活用されていることがうかがえる。

Q 学校ではデジタル機器をどれくらい使っていますか。

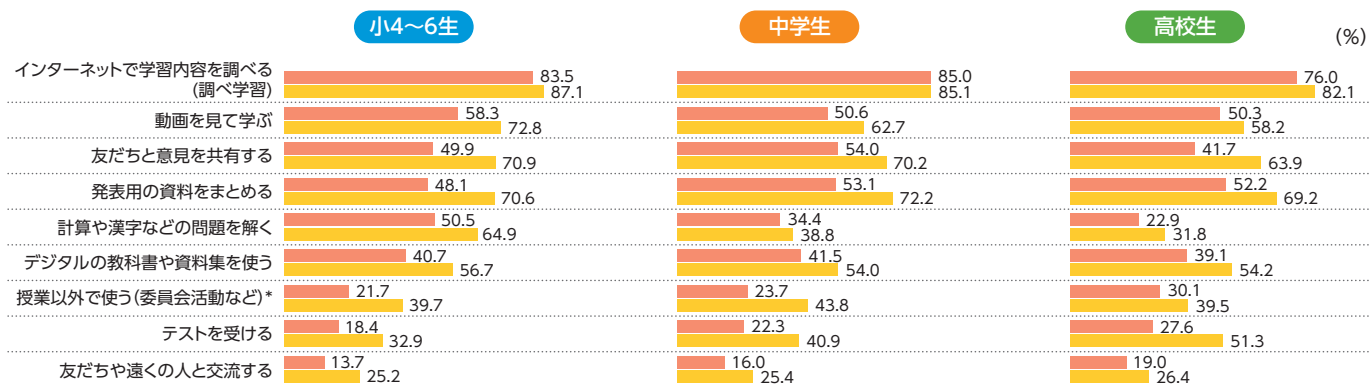
図2-9-1 学校で「ほぼ毎日」デジタル機器を利用している割合



子ども回答

Q 学校ではデジタル機器を使って、次のようなことをどれくらいしていますか。

図2-9-2 学校でのデジタル機器の利用用途



子ども回答

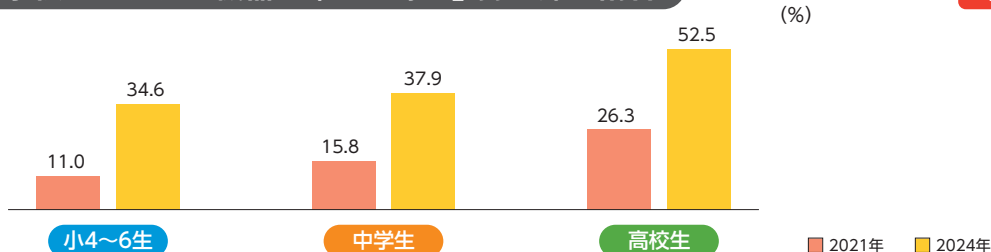
注1 「よくする+ときどきする」の%。

注2 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 *がついている項目は、中高生では、「授業以外で使う(委員会活動・部活動など)」とたずねている。

Q 学校で使用するあなた専用のデジタル機器を、どれくらいの頻度で家に持ち帰っていますか。

図2-9-3 学校のデジタル機器を「ほぼ毎日」持ち帰る割合



子ども回答

Ⅱ 子どもの学びの変化

10 デジタル機器を使った学習の効果と影響

デジタル機器を使う学習について 「深く考えて問題を解くことが減った」が増加

小中高校生にデジタル機器を使った学習に対する意識をたずねたところ、小4～6生は「内容がわかりやすい」、中高生は「友だちと意見交換がしやすい」といったことにもっとも効果を感じている。また、小4～6生や高校生は「自分の意見などを書く量が増える」と感じる割合も増加している。一方で、「学習する気持ちが高まる」という意識はいずれの学校段階でも減少している。さらに、「深く考えて問題を解くことが減った」や「学習した内容が身につみにくい」と感じる子どもが増え、小4～6生はそれぞれ約4割、中高生はそれぞれ4割～5割であった。保護者も同様にデジタル機器の学習効果を評価しつつ、「深く思考しなくなるようで心配」「学習内容の理解不足が心配」「うまく使える子と使えない子で学力の格差が広がる」と懸念を抱く割合も多い。

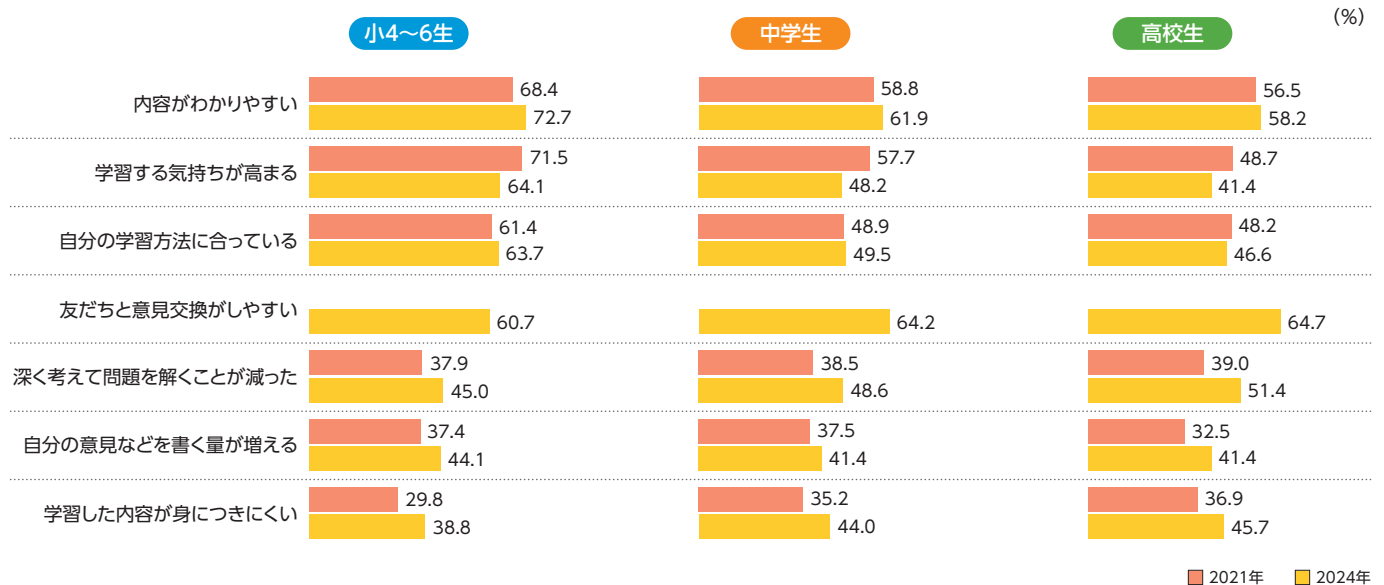


デジタル機器を使った学習は、紙での学習に比べて、どのように感じますか。

図2-10-1 デジタル機器を使った学習の効果と影響

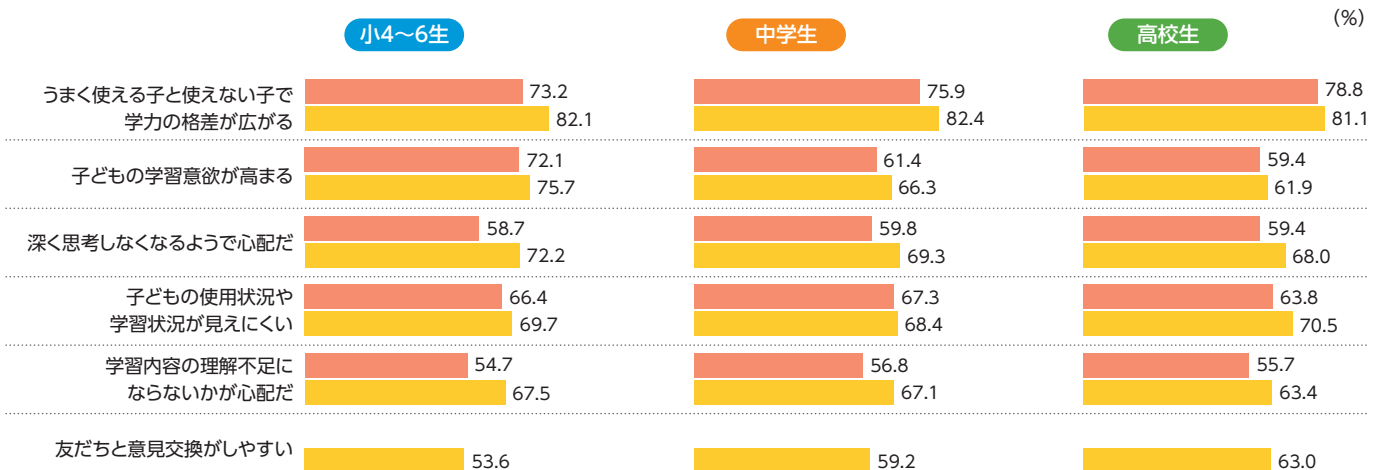
①子どもがとらえる学習効果と影響

子ども回答



②保護者がとらえる学習効果と影響

保護者回答



注1 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。

注2 ①・②の「友だちと意見交換がしやすい」は、2021年調査ではたずねていない。

注3 2024年の小4～6生の数値の降順に示す。

III 保護者のかかわりの変化

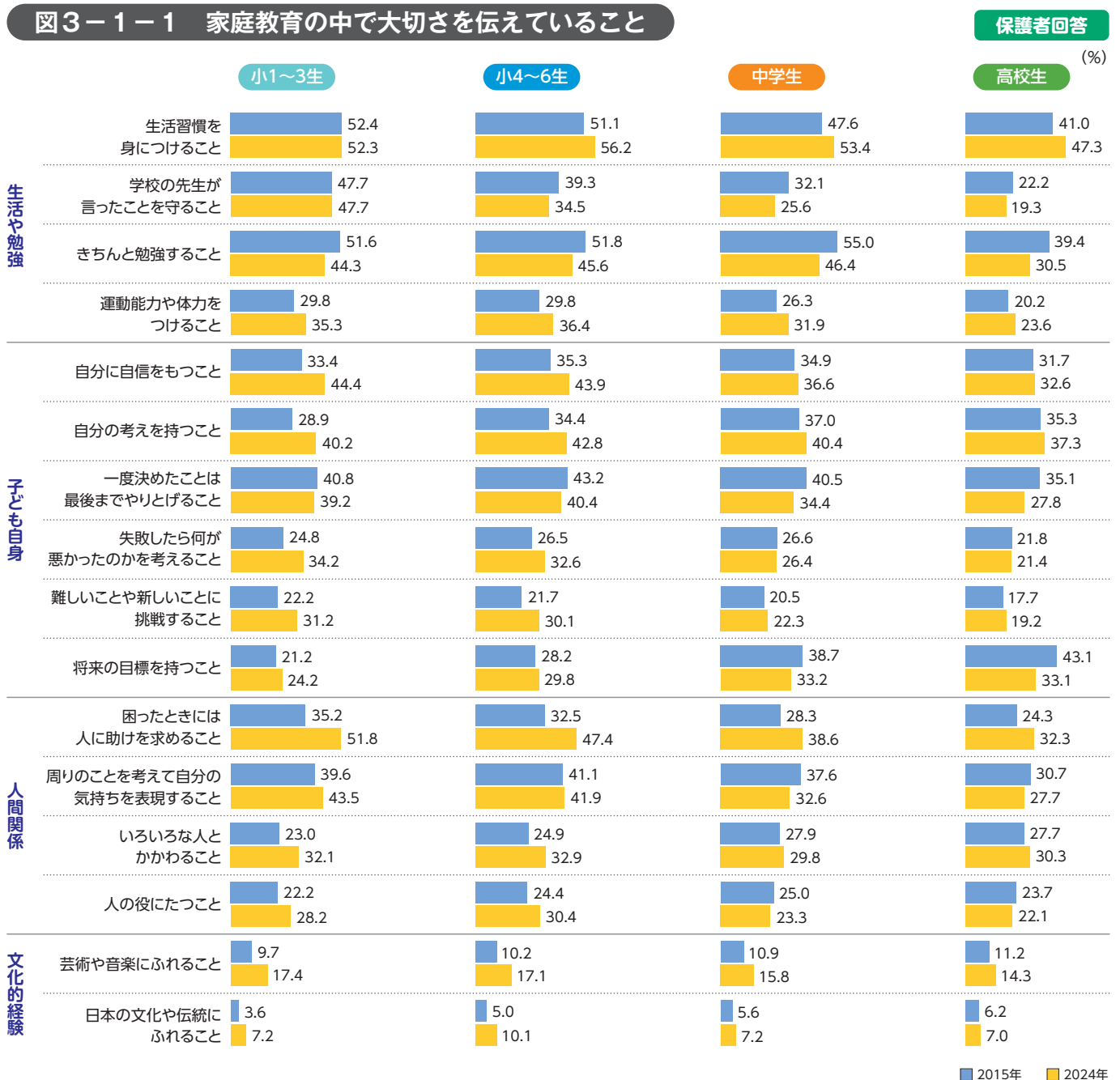
1 大切さを伝えていること

「きちんと勉強すること」の大切さを伝える保護者が減少

小中高校生の保護者に「大切さを伝えている」ことをたずねたところ、2015年から2024年にかけて、「きちんと勉強すること」や「学校の先生が言ったことを守ること」(中学生)、「将来の目標を持つこと」(中高生)の大切さを伝えている割合は減少していた。これに対して、「運動能力や体力をつけること」(小中学生)、「生活習慣を身につけること」(中高生)の大切さを伝える割合は増加傾向にある。また、「困ったときには人に助けを求めること」の大切さを伝える保護者も増えている。さらに、小学生の保護者は「自分に自信をもつこと」や「自分の考えを持つこと」など、生活や勉強の面のみならず、子ども自身の成長や人間関係の大切さ、芸術や音楽、伝統文化にふれることの大切さを伝える割合が増加している。

Q 家庭教育の中で、あなたは調査の対象となっているお子様に、次のこと大切さをどれくらい伝えていますか。

図3-1-1 家庭教育の中で大切さを伝えていること



注1 「よく伝えている」の%。
 注2 24項目のうち、いずれか1つ以上の学校段階で2015年の数値と比べて5ポイント(「よく伝えている」)以上増減している16項目を图示した。
 注3 4分類ごとに、小1~3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。

III 保護者のかかわりの変化

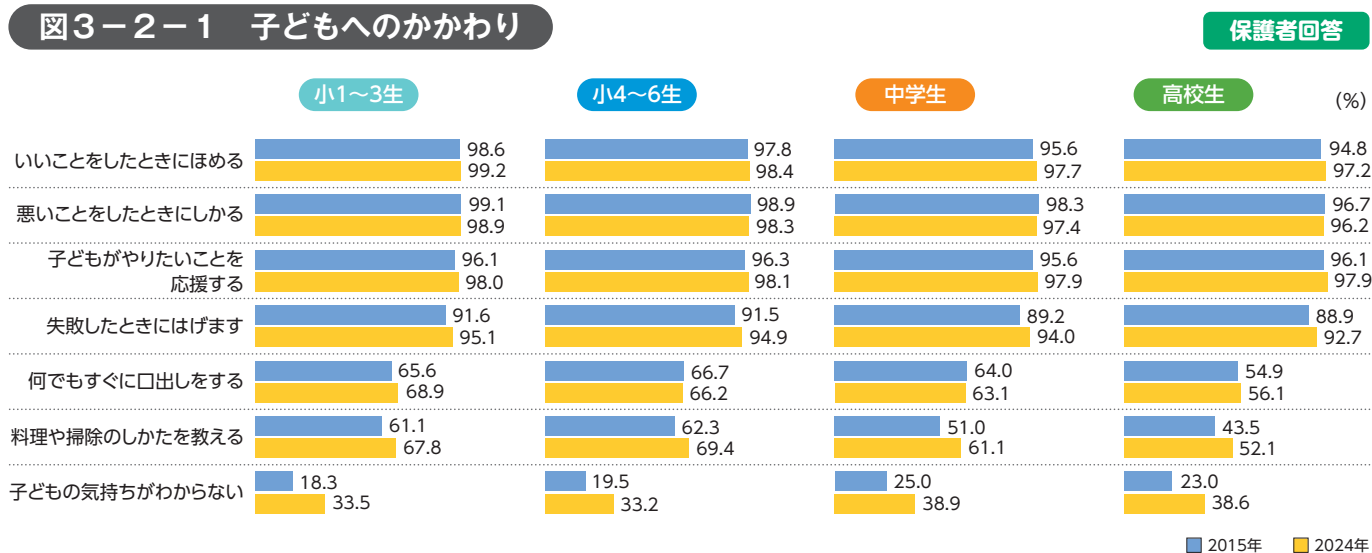
2 子どもへのかかわり

子どもの生活や学習にかかわる保護者が増加

保護者の子どもの生活へのかかわりの変化をみると、「料理や掃除のしかたを教える」が増加しているほか、「子どもの気持ちがわからない」と回答した小中高校生の保護者が、2015年から2024年にかけて10ポイント以上増加した。また、「失敗したときにはげます」という項目は、小中高校生の保護者で微増、「何でもすぐに口出しをする」は小1～3生の保護者でわずかに増加した。勉強へのかかわりでは、「勉強の面白さを教える」「勉強の計画の立て方を教える」と答える保護者が増加した。これとは反対に、中学生の保護者を中心に「テストの成績が悪いとしかる」割合は減少し、子どもに寄り添う姿勢がみられる。全般的に、子どもの生活面から勉強までかかわる保護者が増え、子育てや教育にいっそう熱心になっている様子うかがえる。

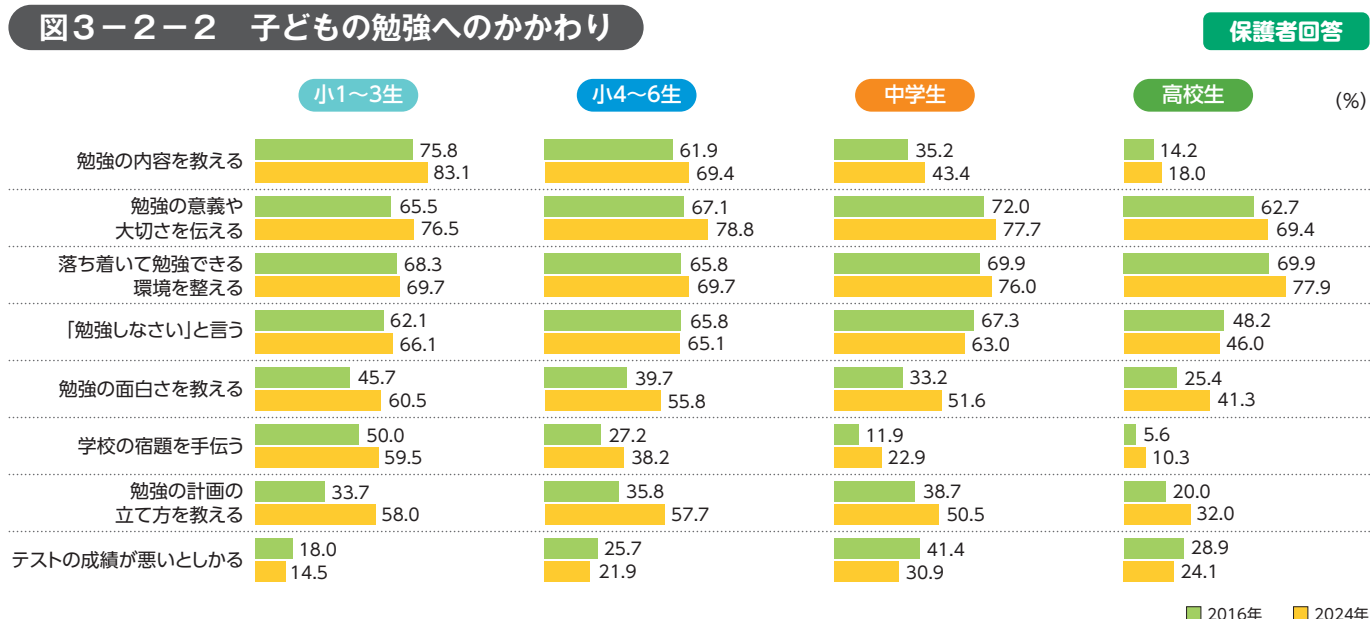
Q 調査の対象となっているお子様に対するあなたのかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図3-2-1 子どもへのかかわり



Q 調査の対象となっているお子様の勉強に対するあなたのかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図3-2-2 子どもの勉強へのかかわり



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。(図3-2-1, 2)

注2 小1～3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。(図3-2-1, 2)

III 保護者のかかわりの変化

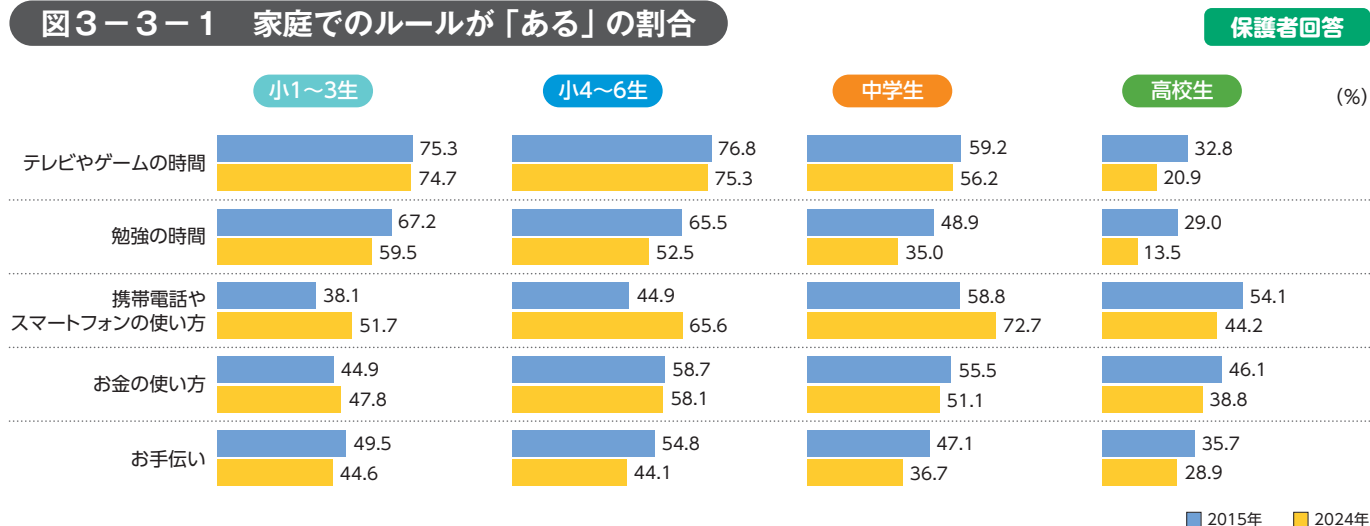
3 家庭でのルール

「勉強の時間」に関するルールが「ある」という回答が減少

保護者に家庭でのルールの有無や子どもがルールを守っているかをたずねたところ、2015年と比較して2024年は、「勉強の時間」に関するルールが「ある」割合が減少した。小1～3生では約6割、小4～6生では5割、中学生では3割強、高校生では1割にとどまった。「お手伝い」に関するルールも減少傾向にあるが、ルールを「守っている」（よく守っている+まあ守っている）と回答した保護者は増加した。一方で、「携帯電話やスマートフォンの使い方」に関するルールが「ある」割合は小中学生の家庭で増加しているが、ルールを「守っている」と回答する割合が減少している。それでも、7～8割の小学生は「携帯電話やスマートフォンの使い方」のルールを「守っている」と回答していた。小中学生に比べて高校生に対してはルールの設定が少ないが、2024年は2015年に比べルールが「ある」割合がさらに低下している。

Q あなたのご家庭では、調査の対象となっているお子様の生活や学習に関して、次のような約束やルールがありますか。あてはまるものをそれぞれお選びください。

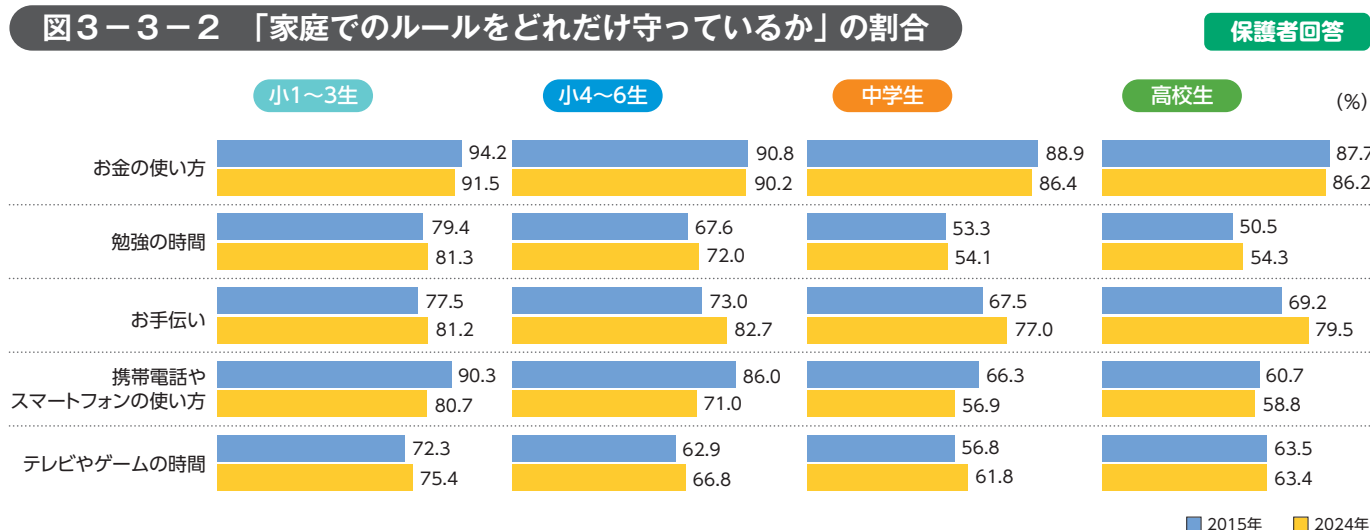
図3-3-1 家庭でのルールが「ある」の割合



注 小1～3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。

Q 前問でご家庭での約束やルールが「ある」と回答した項目について、調査の対象となっているお子様がそれをどれくらい守っているかをお選びください。

図3-3-2 「家庭でのルールをどれだけ守っているか」の割合



注1 ルールが「ある」と回答した人のみ回答。

注2 「よく守っている+まあ守っている」の%。

注3 小1～3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。

IV 保護者の教育実態と教育意識の変化

1 教育費

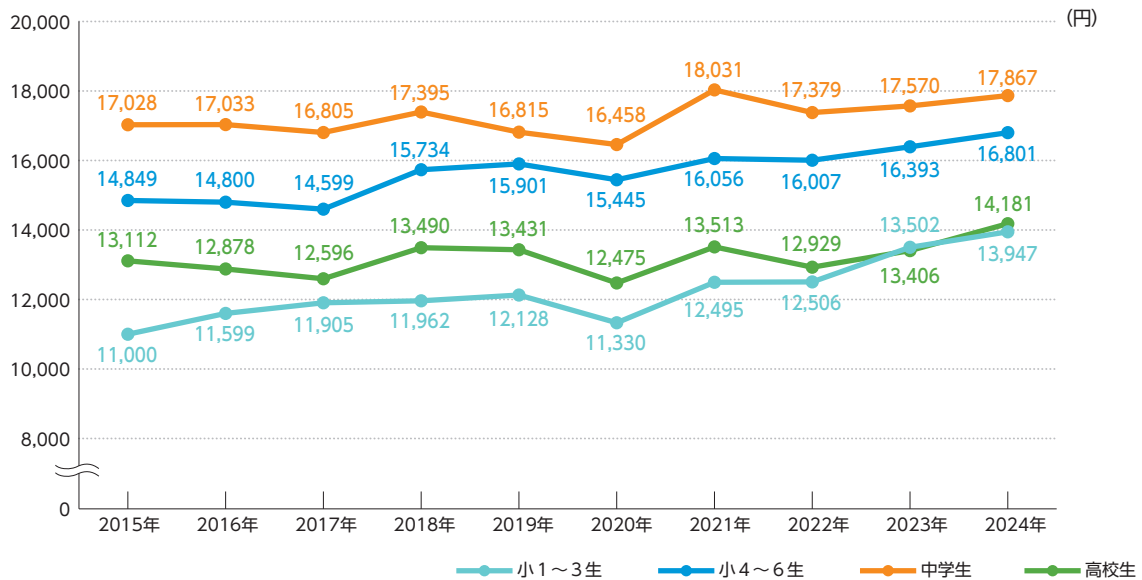
小学生がいる家庭では教育費が増加する傾向

1か月あたりの子ども1人の平均教育費は、中学生がもっとも高い傾向は変わらない。全体的に教育費は増加傾向にあり、学校段階が低いほど伸び幅が大きく、小1～3生は高校生に近い水準となった。2024年の平均は、小1～3生が13,947円、小4～6生が16,801円、中学生が17,867円、高校生が14,181円である。また、1か月あたりの子ども全員の平均教育費も同様の傾向がみられ、中学生がいる家庭の全員平均教育費がもっとも高く39,525円、小4～6生が39,093円、高校生が32,731円、小1～3生が32,218円であった。小1～3生の子どもがいる世帯でも月に3万円以上支出しており、低年齢から重い負担を抱える保護者の姿がうかがえる。

Q 調査の対象となっているお子様1人の教育費の金額を、月平均で教えてください。
(習い事や学習塾の費用、教材費などの合計。学校の授業料は除きます。)

図4-1-1 1か月あたりの子ども1人の平均教育費

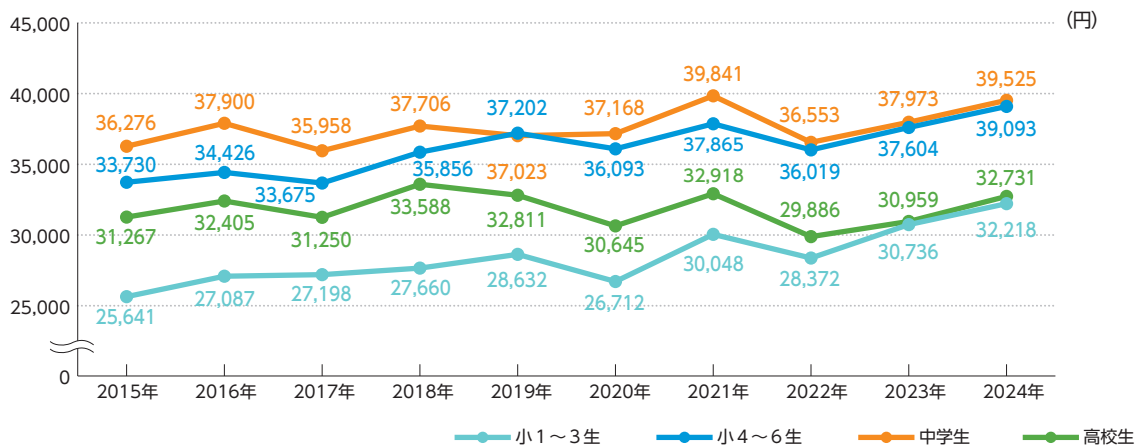
保護者回答



Q 調査の対象となっているお子様を含めた、お子様全員の教育費の金額を、月平均で教えてください。
(習い事や学習塾の費用、教材費などの合計。学校の授業料は除きます。)

図4-1-2 1か月あたりの子ども全員の平均教育費

保護者回答



注 平均教育費は「1,000円未満」を500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を52,500円のように置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。(図4-1-1, 2)

IV 保護者の教育実態と教育意識の変化

2 子育てや教育に関する情報源

「インターネット」や「SNS」から教育情報を得る保護者が増加

子育てや教育に関する情報源の変化をみると、小中学生の保護者は2015年には「子どもの友だちの親(ママ友・パパ友)」が1位だったが、2024年には「インターネットの情報サイト」が伸びて1位になった。また、「SNS・ブログ・インターネットの掲示板」を通じた情報取得も増加している。これに対して、「テレビ」や「書籍」「雑誌」「新聞」といった従来のメディアは後退している。「人」に関する情報源では、「子どもの友だちの親」「友人」は減少し、「配偶者」の割合が増加している。全体として、インターネットやSNSの普及が、子育てや教育に関する情報収集のルートに変化をもたらしていると考えられる。

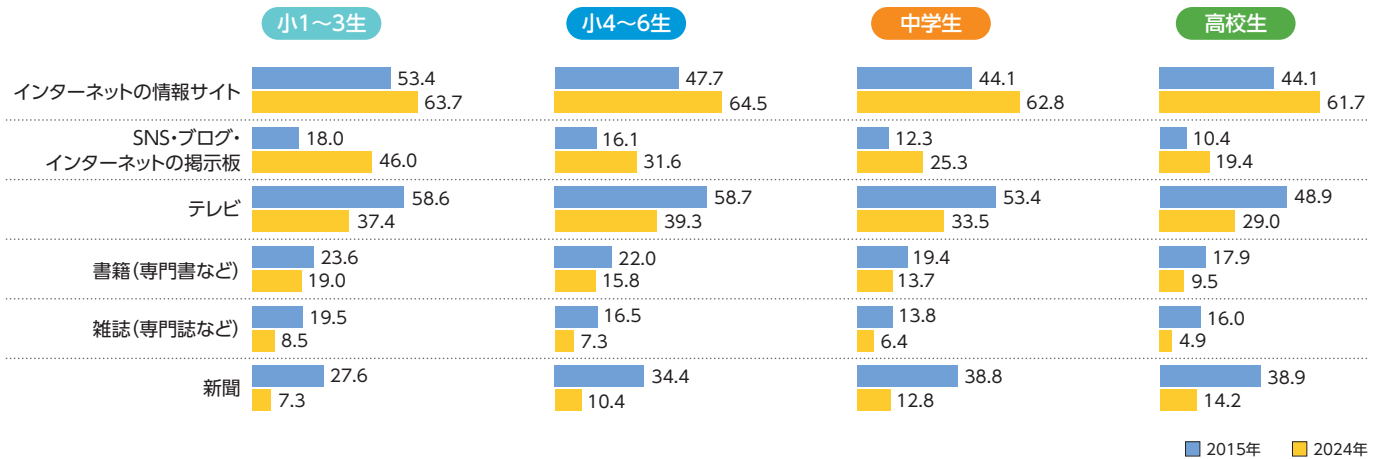
Q 調査の対象となっているお子様についての子育てや教育についての情報を、どこから(だれから)得ていますか。あてはまるものをすべてお選びください。

図4-2-1 子育てや教育に関する情報源

保護者回答

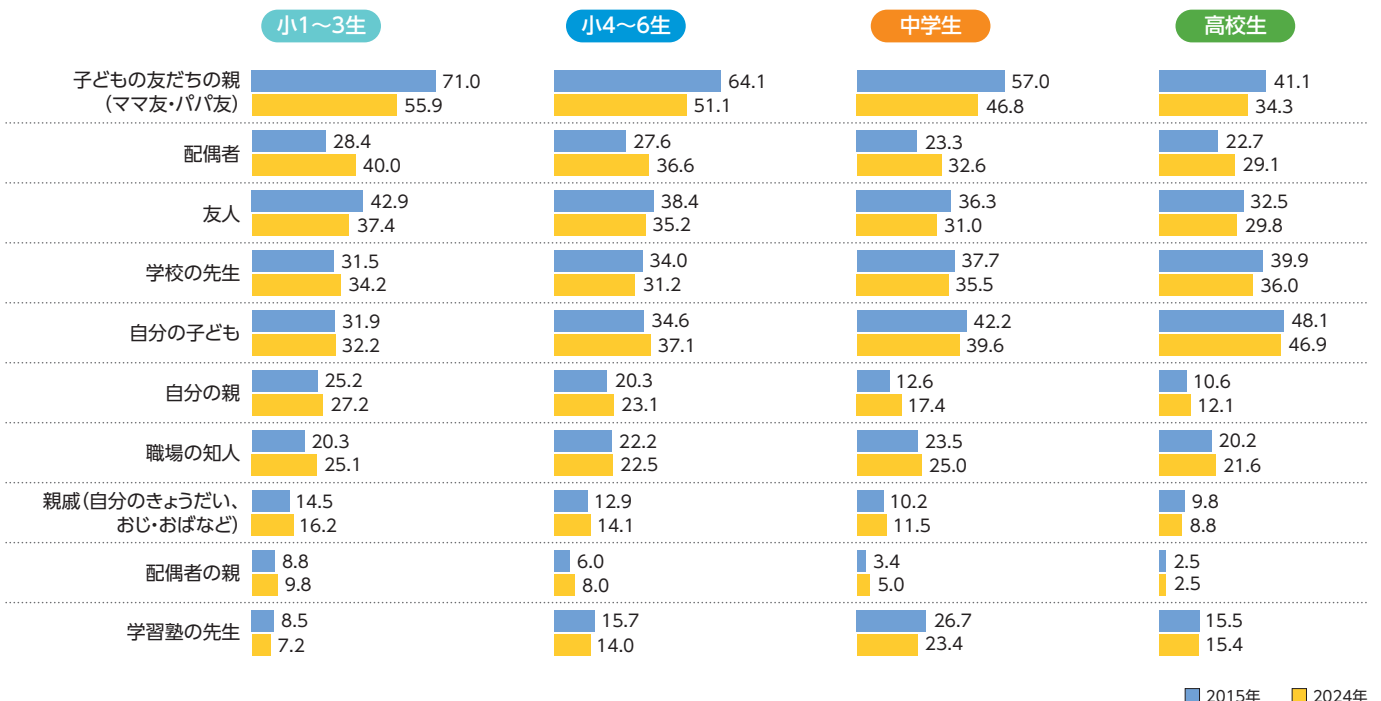
①メディア

(%)



②人

(%)



注1 複数回答。

注2 ①・②は小1~3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。

IV 保護者の教育実態と教育意識の変化

3 悩みや気がかり①

「携帯電話やスマートフォンの使い方」に悩みを抱える保護者が増加

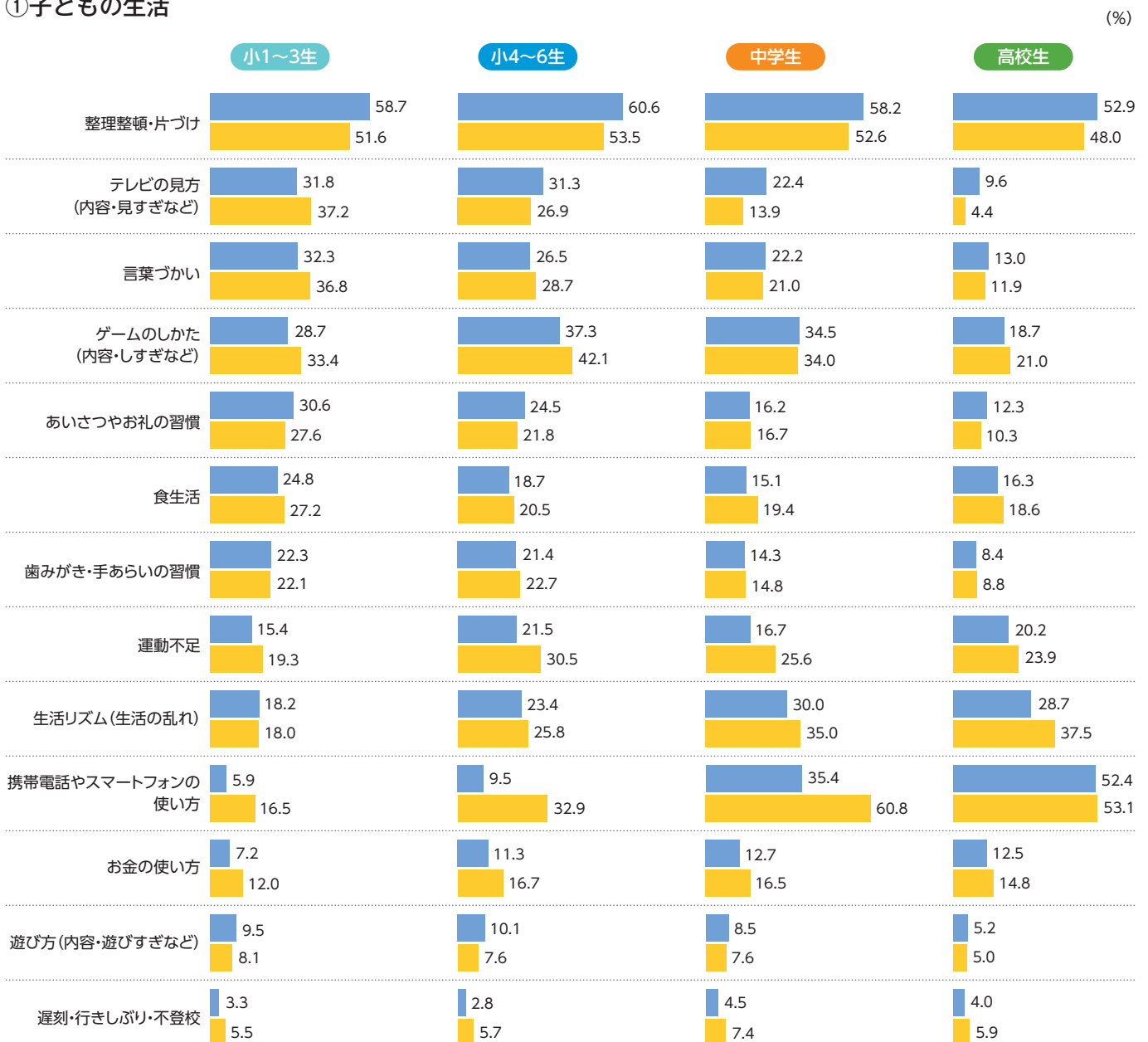
子どもの生活面に関する保護者の悩みや気がかりをみると、小学生では「整理整頓・片づけ」がもっとも多く、中学生では「携帯電話やスマートフォンの使い方」が1位となっている。2015年から2024年にかけての変化をみると、「整理整頓・片づけ」に関する悩みは減少する一方で、「携帯電話やスマートフォンの使い方」に悩む小中学生の保護者や、「生活リズム」に悩む中高生の保護者が増加している。「テレビの見方」は小1～3生では増加しているが、中学生では減少している。これらの変化は、生活様式の変化やスマートフォンの普及が影響していると考えられる。

Q 調査の対象となっているお子様やあなたご自身のことについて、次のような「悩みや気がかり」はありますか。あてはまるものをすべてお選びください。

図4-3-1 保護者の悩みや気がかり

保護者回答

①子どもの生活



■ 2015年 ■ 2024年

注1 複数回答。

注2 小1～3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。

IV 保護者の教育実態と教育意識の変化

3 悩みや気がかり②

子どもの成長や人間関係、子どもの学習に関する保護者の悩みは減少

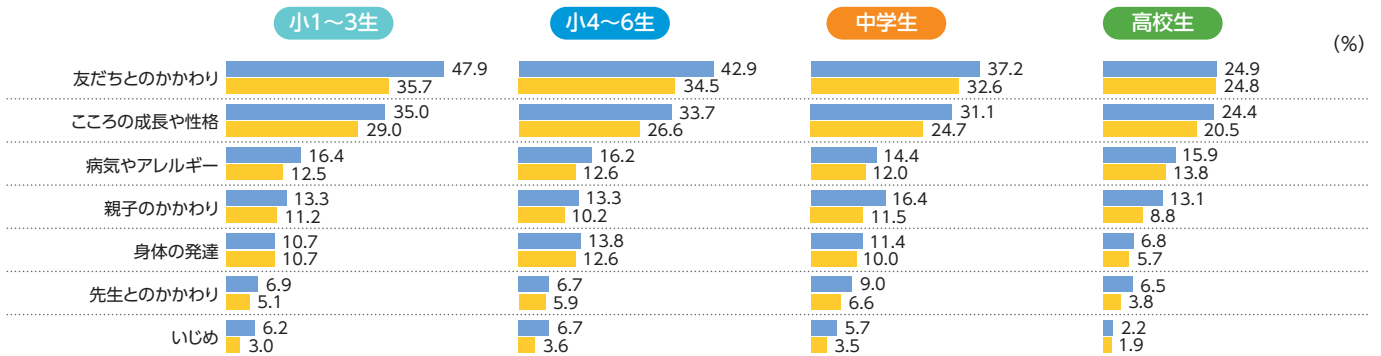
前ページに引き続き、保護者の悩みや気がかりについてみると、2015年に比べ子どもの成長や人間関係に関する悩みは全般的に減少傾向にあり、特に小学生では「友だちとのかかわり」や「こころの成長や性格」が減少した。学習面でも、保護者の悩みは減少しており、小学生の保護者は「習い事や塾・教材選び」、小学生と高校生の保護者は「家庭学習の習慣」、中高生の保護者は「教育費」「学校の成績」「進路・学校選び」に関する悩みが減少している。保護者自身に関する悩みでは「家庭の経済状況」がいずれの学校段階でも減少しているが、「こころの健康状態」に関する悩みはわずかに増加している。全体として、前ページに示した子どもの生活面での悩みは増加しているものの、それ以外の悩みは減少傾向にある。

Q 調査の対象となっているお子様やあなたご自身のことについて、次のような「悩みや気がかり」はありますか。あてはまるものをすべてお選びください。

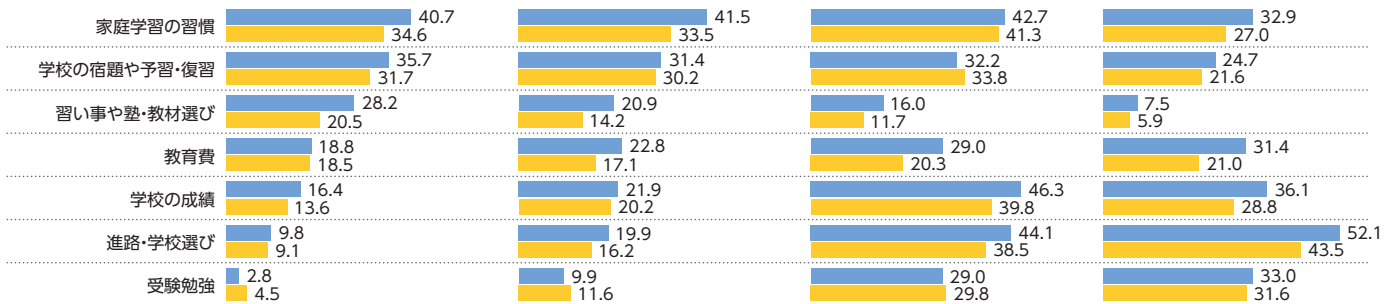
図4-3-1 保護者の悩みや気がかり

保護者回答

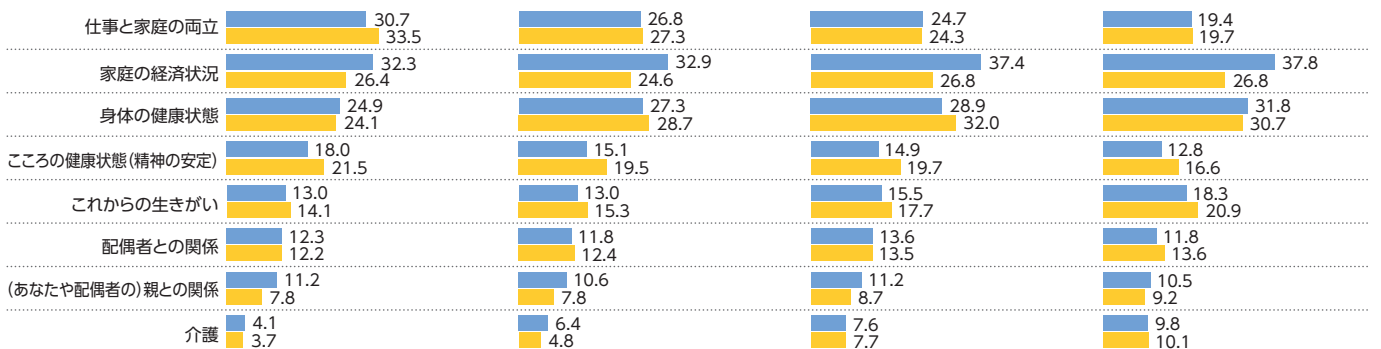
②子どもの成長や人間関係



③子どもの学習



④保護者自身



■ 2015年 ■ 2024年

注1 複数回答。

注2 小1~3生がいる保護者の2024年の数値の降順に示す。

V 親子の意識や満足度

1 親子の進学意識

小学生は親子ともに、「大学以上」の進学希望が増加

子どもに希望する進学段階をたずねたところ、小4～6生で「大学以上」(大学(四年制、六年制)まで+大学院まで)を希望する割合が2015年に比べて6ポイント増加し、5割を超えた。中学生では6割、高校生では7割が「大学以上」を希望しており、2015年から変化がみられなかった。一方で、進学段階について「まだ決めていない」と答えた中学生は2015年に比べ微増している。また、保護者の希望する進学段階の変化をみると、子どもを「大学以上」に進学させたいと考える小学生の保護者は、2015年の6割から2024年には約7割に増加した。「大学以上」を希望する割合は、小中学生では一貫して、子どもよりも保護者のほうが多い。

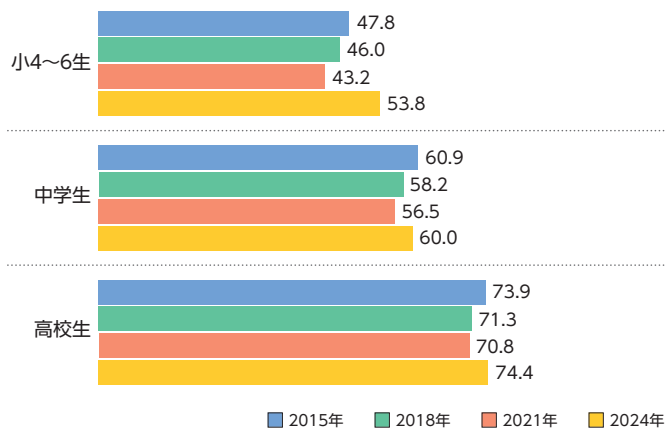
Q あなたは、将来、どの学校まで進みたいと思いますか。

図5-1-1 子どもが希望する将来の進学段階

子ども回答

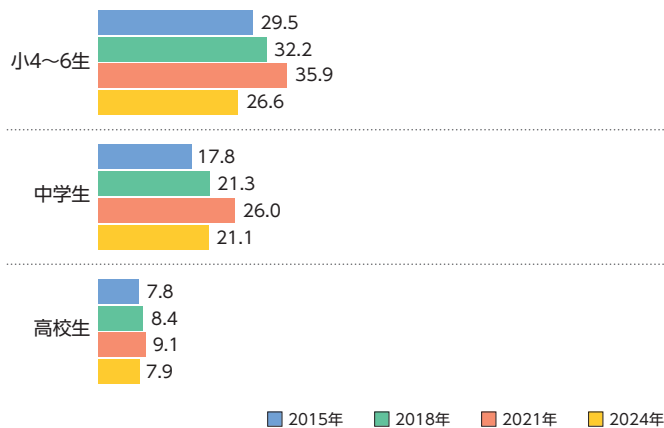
① 「大学以上」を希望する割合

(%)



② 「まだ決めていない」の割合

(%)



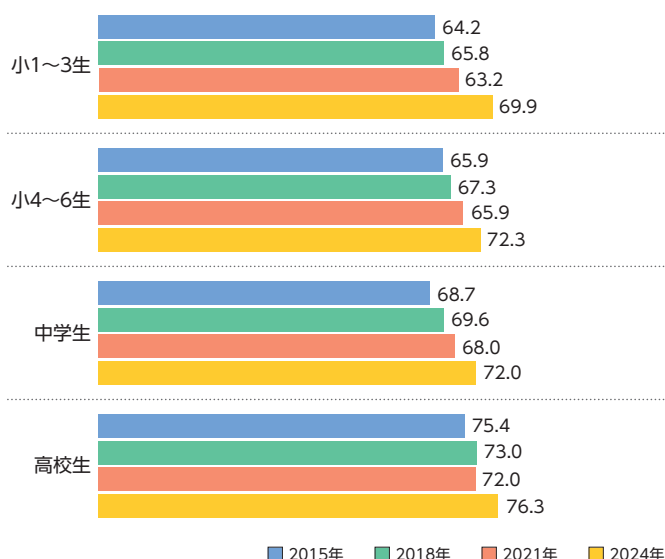
Q あなたは、調査の対象となっているお子様を、将来、どの学校段階まで進学させたいとお考えですか。

図5-1-2 保護者が希望する子どもの将来の進学段階

保護者回答

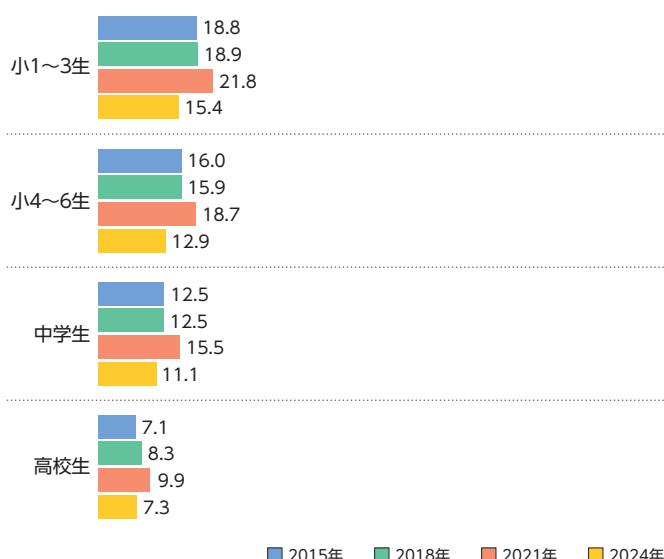
① 「大学以上」を希望する割合

(%)



② 「まだ決めていない」の割合

(%)



注 「大学以上」は「大学(四年制、六年制)まで+大学院まで」の%。(図5-1-1、2)

V 親子の意識や満足度

2 満足度・幸せ実感

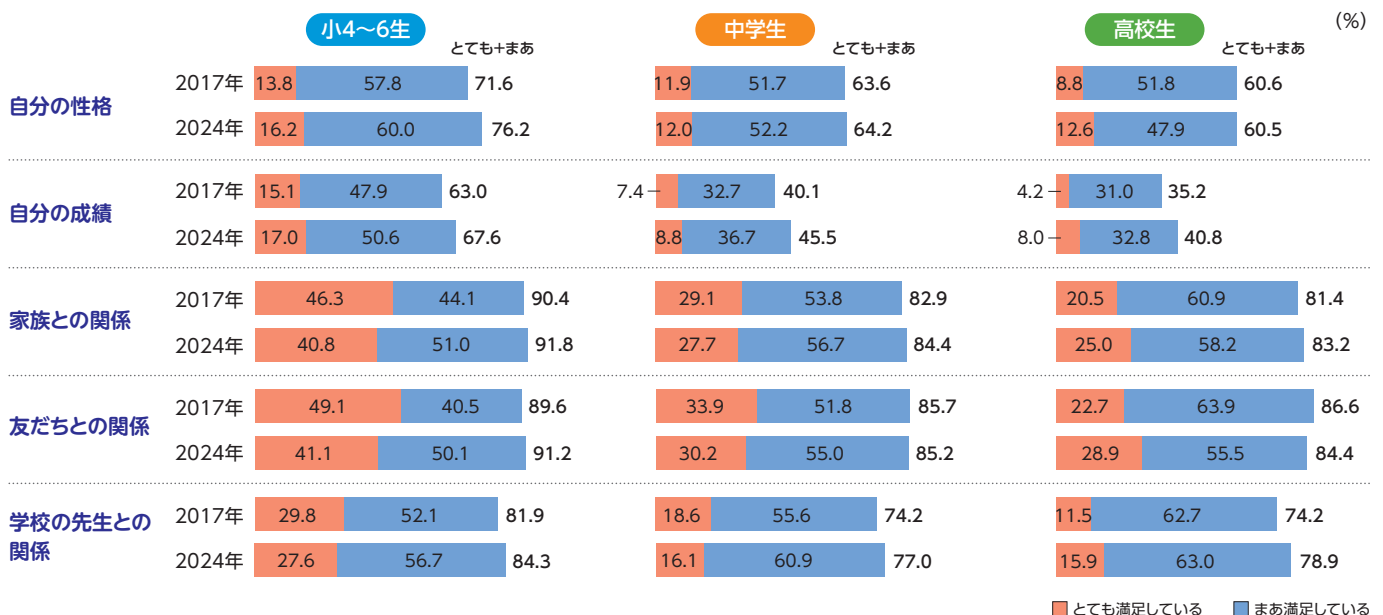
「自分の成績」に満足する小中高校生が増加

子どもたちのさまざまな満足度の変化をみると、「自分の成績」に対する満足度(とても満足+まあ満足)は2017年から2024年にかけて上昇している。一方で、「友だちとの関係」や「家族との関係」については、小4～6生で「とても満足している」割合が減少している。また、親子に今の幸せの実感と将来の幸せの見通しについてたずねたところ、中高生の「今、幸せだ」や「将来、幸せになれる」と感じる割合は若干減少し、小4～6生でもそれぞれ「とてもそう思う」割合が減少した。一方、保護者に関しては、小4～6生と中学生の保護者の「この先、幸せになれる」に「とてもそう思う」割合がわずかに増加していることが確認された。

Q あなたは、次のことにどれくらい満足していますか。

図5-2-1 さまざまな満足度

子ども回答

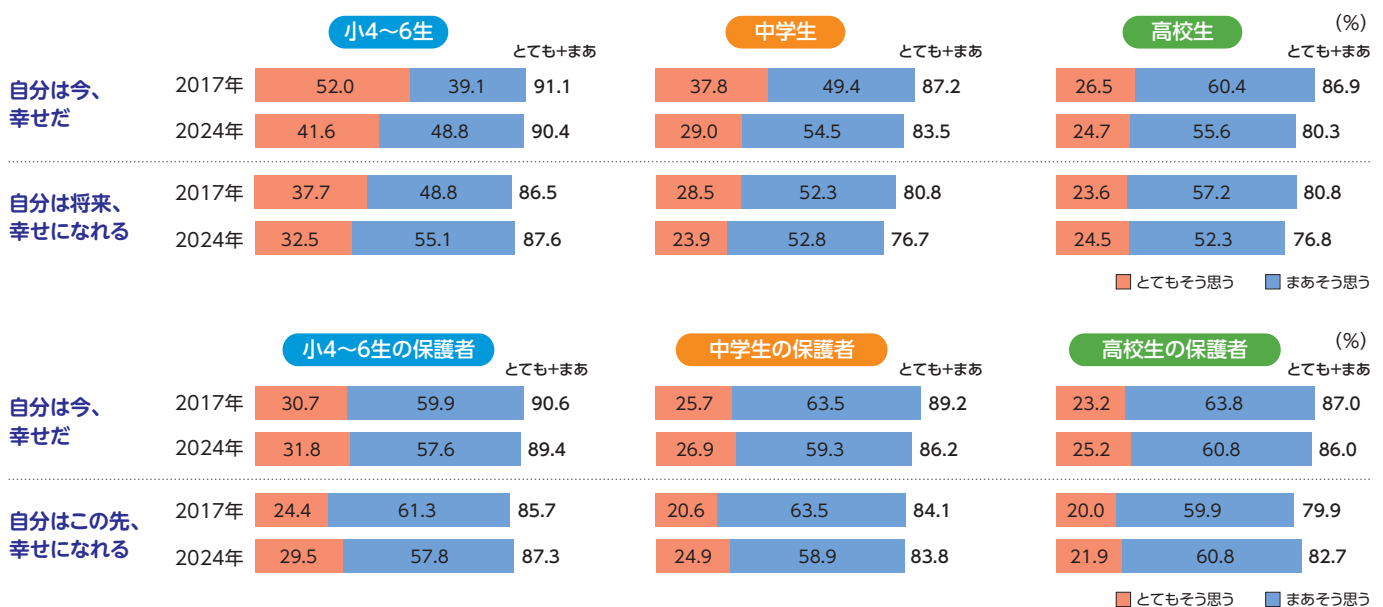


Q あなたは、次のことについてどう思いますか。

図5-2-2 親子の幸せ実感

子ども回答

保護者回答



東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究 「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

佐藤 香 (東京大学社会科学研究所 教授)

野澤 雄樹 (ベネッセ教育総合研究所 所長)

プロジェクトメンバー

耳塚 寛明 (お茶の水女子大学 名誉教授、青山学院大学 客員教授)

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所 主席研究員)

秋田 喜代美 (学習院大学 教授、東京大学 名誉教授)

岡部 悟志 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

松下 佳代 (京都大学 教授)

福本 優美子 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

石田 浩 (東京大学社会科学研究所 特別教授)

朝永 昌孝 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

藤原 翔 (東京大学社会科学研究所 准教授)

松本 留奈 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

大野 志郎 (東京大学社会科学研究所 特任准教授)

中島 功滋 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

大崎 裕子 (立教大学 特任准教授)

大内 初枝 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

渡邊 未央 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

※ワーキンググループメンバー

小野田 亮介 (山梨大学大学院 准教授)

数実 浩佑 (宝塚大学 准教授)

猪原 敬介 (北里大学 講師)

豊永 耕平 (近畿大学 講師)

※所属・肩書きは、2025年3月時点のものです。

研究プロジェクト WEBサイトのご案内

東京大学社会科学研究所

<https://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/>

東京大学 社会科学研究所
子どもの生活と学び 研究プロジェクト

ISS

東京大学 社会科学研究所は、2013年度より
ベネッセ教育総合研究所と共同で「子どもの生活と学び」研究プロジェクトを行っています。

東京大学社会科学研究所はベネッセ教育総合研究所と「子どもの生活と学び」に関する共同研究プロジェクトを実施しています。
小学校1年生から高校3年生までの親子、高校卒業後は子ども本人を対象に、同じ対象者を追跡する「パネル調査 (Japanese Longitudinal Study of Children and Parents) (JLSCP)、Japanese Longitudinal Study of Youth (JLSY)」を行い、子どもの生活や学習の状況、保護者の子育ての様子、さらに子ども本人は社会に出てからの様子を複数年にわたって追いかけることで、子どもを取り巻く状況の変化と子どもが社会人として自立するまでの成長のプロセスを明らかにしていきます。
これらの豊富なデータから得られたエビデンスをもとに、現在を生きる子どもにとってのよりよい子育て、教育のあり方を検討していきます。

詳しくはプロジェクトホームページ (ベネッセ教育総合研究所内) をご覧ください。

ベネッセ教育総合研究所

<https://benesse.jp/berd/special/childedu/>

ベネッセ 教育総合研究所
「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

約20,000組の
親子調査 (日本最大規模) で
学びや生活の実態を
明らかにします。

調査データ 研究成果

最新情報

すべて 調査データ 研究成果 モニター

「子どもの生活と学びに関する親子調査2024」ダイジェスト版

発行 日：2025年3月28日

発行 人：野澤 雄樹

編集 人：木村 治生

発行 所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集 協力：邵 勤風

0HNBC3

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。